
闇守護業 5 《灰想》

祐太

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

闇守護業 5 《灰想》

【Nコード】

N7393A

【作者名】

祐太

【あらすじ】

近未来の日本には、荒廃した無法地帯『裏社会』があつた。そんな光の届かぬ闇の世界で、守護を貫く者達がいる。『闇守護業』第五話は、5人それぞれが語る過去の物語。一章ごとに違う主人公！

〈遠い追憶〉

遠い 永い いつかの日。

優しさの記憶は 心を束縛し、

悲しさの記憶は 心を呪縛する。

軌跡へ振り返れば、笑顔も涙もそこには、確かに。

忘れゆく物語 消えゆく記憶。

思い出す物語 蘇る記憶。

どうか どうかこの一時だけは

甘く苦い追憶に溺れさせて。

〈遠い追憶〉（後書き）

この第五話は、各章ごとに主人公が異なり、一人称で語られます。そのため、どの章から読んでもご理解いただけると思います。

主な登場人物紹介（前書き）

主たる登場キャラクターの紹介です。

『闇守護業』はシリーズ物ですが、この紹介を読めば初めての方でもおわかりいただけるかと思えます。

主な登場人物紹介

『闇守護業』 主な登場人物

蒼波 遼平…21歳

紺色のやや長い髪は寝癖でいつもボサボサ、瞳は漆黒。裏警備会社中野区支部社員の男。元・東京最強のグループ『スカイ』を裏切ったため、「最低最悪の裏切り者、《邪鬼の権化》」と呼ばれている。

『音の民』蒼波一族の末裔で、普通人間には聞こえない超音波を聞き取り、発する能力を持つ。蝙蝠と意思疎通が可能で、吸血蝙蝠「宋兵衛」と契約を交わしている。肉弾戦が得意。

面倒臭がりでキレやすい。頭の回転は鈍く、ほとんど勘で行動。ふざけた態度と感情的な言動、かなり野生的。自己中心的な性格。

純也…?歳

白銀の髪、ライトブルーの双眸。裏警備会社LK中野区支部の社員兼治療員担当の少年。見た目は15〜6歳程度で、現在は遼平のアパートに居候中。

2年前、遼平に拾われた時以前の記憶が無く、覚えているのは自分の名前らしき『純也』と膨大な医学の知識だけ。どこの誰なのかは一切不明。風を操る不思議な特殊能力があるが、普段は専ら合気道に近い武術を使う。

穏やかで非常に優しく、記憶力・洞察力に長けるが子供っぽい。とても知能が高く、感受性豊かで、好奇心が強い。趣味は料理と折り紙、更に大食い。身長が低く遼平より頭一個分下。人や動物を傷つけることを嫌い、殺生を憎む。

霧辺 真：25歳

金の跳ねた短髪。眼は黒で、皮膚は浅黒い。裏警備会社LKの若き中野区支部部長。関西弁を話す、自称『愛の警備員』であり、過去の連続殺人犯《斬魔》でもある。

普段は腰に下げた木刀で敵を薙ぎ払うが、それは鞘であり、中に凶刃『阿修羅』が収まっている。『閃斬白虎』流剣術の使用者。

いつもは賑やかな遼平達の傍観者だが、最近は特に部下にいじられ気味。メンバーの中では最もマトモな感性の持ち主で、責任感が強く、広い視野から物事を見極める事の出来る貴重な人物。最近、メンバーの非常識な言動に胃薬が手放せない、苦勞人。一度暴走し始めてしまった部下（主に遼平）を止める為、ハリセンを常に携帯している。実は物凄い愛妻家でもある。

紫牙 澪斗：22歳

淡緑色、ストレートな短髪。瞳は暗褐色。かなりの美男。裏警備会社LK中野区支部社員の男。かつて暗殺成功率百パーセントの殺し屋、《消去執行人》（エクスキューション）との異名を持っていた。

仕事中かけている眼鏡は別に目が悪いわけではなく、希紗の作った照準グラス。ちなみに、澪斗が専ら使用するカートリッジ式銃『ノア』も希紗の手製で、照準グラスと連動している。実は愛用のリボルバー式マグナムもあるが、希紗の前では使いたがらない。

冷静で寡黙、他人の感情に鈍く、時に冷酷でもある。プライドが高く、遼平の挑発にのることもしばしば。慎重で、人間不信な面もあるが、根は生真面目で頑固。笑うことは滅多に無く、愛想は皆無。人間に興味無し。遼平とは犬猿の仲。

安藤 希紗… 19歳

茶髪、ポニーテール。やや茶色の瞳。裏警備会社LK中野区支部の社員であり、メカニックカーであり、紅一点。

巡回などより監視室での監視、警備員の装備品の制作、監視システムの改良などが主な仕事。非戦闘員。

明るく常に元気で、チームメンバー曰く『遊び心の塊』。どんな状況でも空元気で突き進む、支部のムードメーカー的存在。過去のトラウマにより、拳銃を恐れている。実は、少女っぽく繊細な一面も。彼女の自称《女の勘》は時に驚異的に的中する。密かに澪斗を気にしているらしい。

「裏警備会社 Lose Keeper」

『裏社会』……近未来日本の、犯罪が絶えない無法地帯。そんな社会に、《守護》を仕事とする変テコで一流な警備会社、それが『ロスキーパー』。

これは、影を背負いながらも《守護業》を貫く、おかしな人間達の物語。。。

第一章『優しき獣』(1)

依頼5《過日》カジツ

第一章『優しき獣』

「つうーばあーさあーっ!!」

「ごっ、ゴメンっ、あとちよつと待って！ ねっ？」

もうとつくに痺れを切らした俺の唸りに近い声に、焦る男の背中。振り返って「一生のお願いだから待ってよ」とか懇願しだすから、

「じゃあ無駄口叩いてんじゃねえ！」と一喝してやった。

「まあまあ遼平、そんなに焦らさなくてもいいじゃないですか」

湯飲みを盆に乗せて、床の間の奥から着物の似合う女が出てくる。桃色の鮮やかな長髪を結わえて、にこやかに微笑んで俺に湯飲みを差し出してきた。

「だってよ時雨、こいつメモ一枚書くのに三十分以上もかけてるんだぜ!？」

「しょうがないじゃないか、俺は文字書けないんだからあゝっ」

「うつせえ！ てめえは無駄口叩くなっって言ってるんだろっがあ！」

「痛っ、痛いよ遼平！ グーで殴るのは無しだよ！」

「じゃあパーならいいのかつ、ああん!？」とか叩きだすと「それ、それも痛い〜っ」とか涙声になる、情けない男、翼。

ああ、俺はなんでこんな所でこんな事してるんだ？

こつちより身体の大い翼をついには蹴り倒してから、俺は思い出そうとしてみる。

始まりは一週間前のことだ。

笑い話にもならねー事情で路上生活を始めた俺に、ある男から声がかけられた。

そいつは俺に興味を持ったみてえで、「俺達の仲間になってくれないか？」とか言いだしやがった。

まだ何の言葉も交わしてねえのに、いきなりそれだけ？ 普通は怪しむよな。俺だって疑った……っ！か、面倒だったから殴りかかった。

そしたらその男、俺の攻撃を全てかわしやがった。住んでた路上の野郎共全員潰した俺の、拳を。

しかもそいつ、まだ笑顔浮かべてるじゃねーか。俺は完全に腹が立った。けど、潰しがいのありそうなヤツを見つけれられた興奮もあった。

男は、自分が『スカイ』という名のグループに所属していること、『白鷹翼』(しらたか つばさ)っ！つーやたらと画数の多そうな名前だと名乗った。

俺は……名前を『遼平』とだけ言って、後は何も語らなかつた。なのにそれに不信感なんて欠片も持たねえで、翼は呑気そうな笑顔で俺を誘拐……っ！てか拉致？ というか半強制的にスカイの縄張り(実はこれが俺の住んでた路上と近かつた)に連れていった。

で、今日。

なんでも翼は、このスカイの幹部らしい。そしてもう一人の幹部、流華時雨りゅうかが表社会でやってる花屋に、俺は呼び出されたわけだ。

低血圧で朝は機嫌の悪い俺を早朝から呼び出した拳げ句、来てみたら「お使いを頼みたい」だあ！？ 俺をなんだと思ってるやがるっ！ 更に更に。そのお使いとやらのメモを書くのに、翼はかれこれ三十分以上かけてやがる。……ちなみにだが、《俺が来てから》三十分であつて、それより前からこいつはメモを書いていたらしい。なんでそんなに時間をかけているかと言うと

「お、俺はこの前時雨に『ひらがな』を教わったばかりで……まだ五十音表を見ないと書けないんだよ〜っ」

「小学校一年レベルか、てめえの頭は！ 俺だって簡単な漢字なら書けるぞ！ いくつだ翼！」

「たぶん十九歳……かなあ？ あ、ちなみにカタカナは書けないけど、みんなの名前の漢字くらいなら少しは……」

「自分の歳もわからねえのかよ！ 時雨、何なんだこのバカはあ！？」

小さな笑いを堪えていた時雨だが、俺に問われると少し困った表情をする。時雨はともかく、こんなヤツが幹部でいいのか！？

「えっと……、翼は、生きるために必要な知識はしっかり持っているんですよ」

「うんうん、東の空に雲が広がったら次の日は雨とか、食べられる野草の見分け方とか……」

「ババアの知恵袋かてめえはー！！」

腕を組んで一人で頷いている翼の後頭部へ、俺のハイキックが直

撃。顔面を畳に強打。

「ちよ、遼平、俺ボケてないんだけど……。激しすぎるよツッコミが……」

てめえと漫才する気なんてさらさらねーんだよ！ あゝっ、すっ
げーム力つく！！

そして、更に三十分後。

「出来たっ、書けたよ遼平ー！」

「こんくれえのことで感涙してんじゃねえよ……。ったく、じゃあ
行ってくるからな！」

随分とシワの寄った二つ折りの紙を受け取り、時雨から財布を預
かって俺は店から出て行く。

まずはドコに行けばいいのかと、店を一步出てからメモを開いて

『おつかいのめも。遼干へ』

「誰がリヨウカンじゃボケエエエ！！！」

一仕事終えた後の充実した笑顔で茶をすすっている翼へ、飛び蹴
りを喰らわしてやった。

気絶間際にこぼれた緑茶で『りょう』と畳に指で書いていたが、
ただの茶なので当然すぐに蒸発して必死のダイニングメッセージは
消えた。

最初に言っておこう。俺は今、とても機嫌が悪い、と。

誰に対して言ってるかとか、そういう細かいコトはどーでもいい。とにかく今、俺は邪気をまとうほど不機嫌な顔で、ブツブツ言いながら路地を歩いている。

有り得ねえ、有り得ねえよ、こんなの渡されて……。

『有り得ねえ、有り得ねえよ、こんなの渡されて……どーしろつてんだあー!!』

俺の呟きも叫びも、人間には聞き取れない。俺が本気で不機嫌になると、こうなる。……ってか、自分で音の高低が制御できなくなるんだ。

心の声と同時に出了俺の超音波は、ついアイツらを呼んじまう。

『なになに、どーしたのリヨーヘイ!!』

『リヨウヘー怒ってる〜?』

『……なんでもねえよっ』

まだ昼間だったのに、どこからともなく舞い降りてきて俺の両肩にそれぞれ着陸する黒翼。路上で生活し始めて出来た、《知り合い》。まだ子供の、幼い双子蝙蝠。

『リヨーヘイ、怒ってる、どーして??』

『カスト、ポルック! 黙らねえと殴るぞ!!』

拳を振り上げたが、これが間違いだった。余計ヤツらのテンションを上げちまったからだ。かまってくれる相手を見つけて、嬉々として喜んでやがる。

『リヨーヘイは殴らないよね、ポルツク』
『だってリヨウヘーは優しいもんね、カスト』
『ねーっ』

無邪気な声で頭上を飛び始めたカストとポルツクに、俺は肩を下げる。誰が『優しい』だって？ 俺は……。

「わーっ、コウモリだあー！ ねえねえ、お兄ちゃん！」
「あ？」

振り返ると、こつちへ駆けてくる緑シャツのガキが一人。前に立つと、背丈は俺の胸あたりまでしかない。

「スツゴイね、コウモリだあ！ お兄ちゃんのペットなの！？ 僕にも見せてっ！」

「……………」
ガキらしい好奇心の瞳で、俺の両肩に留まってきたよんとするカストとポルツクに手を伸ばしてくる。二匹の蝙蝠は、その小さな手から逃れて俺の背中に隠れる。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんってさ、」

「………… 失せる、ガキ。どいつが俺のペットだと？ 人間と動物に優劣の差があると思ってるやがんのか。失せる気がねえなら、俺が、消す」

光の無い漆黒の瞳で睨むと、ガキは震えて逃げていった。………… 俺は、ガキが嫌いだ。

『リヨーヘイ、怒らないで』

『ごめんね、ごめんね、僕たちのせい？』

『………… 別に、お前らが気にすることねえよ。あのガキが気に入らな

「かつただけだ」

人間が動物たちの頂点に立っていると考えるヤツが……俺は、人間自体が嫌いだ。こいつらの声も聞こえないくせに、弱いから群がって行動しなきゃ動けねえくせに、何様だよ。

「でもリヨーヘイ、今の子はニンゲンだよ？ リヨーヘイの仲間だよ？」

「なんでリヨウウヘーはニンゲンが嫌いなの？」

「……………嫌われたことしかねえから、だろうな」

ま、結局はそんなくだらねー理由なんだろうな。人間の醜い姿をあれほどまでに見せられて、好きになれるヤツがいるならそいつはトチ狂ってるか、仏じゃねーの？

「俺は優しくなんかねえんだ……『優しさ』なんて、知らねえんだから」

カストとポルックには低すぎて聞こえないであろう呟き。自分で口にして、その言葉が心に刺さる。『優しさ』が……わからない。

「って、今はそんなコト考えてる場合じゃねえ！ 俺の不機嫌の元凶、《コレ》をどうにかしねえと……」。

翼の、『メモ』と偽られた暗号解読を。

「やってくるもの。すーい、やばーい、いん、くしち」

……わからねえ……！！

何度見ても、どう考えてもわからねえ！

なんだ、何なんだ、これは罫か？ 何かの罰ゲームか？ なぞなぞか！？

とりあえず引き返そうとして、財布にメモをしまおうとしたら、中に一枚の小綺麗な紙があった。開くと、筆文字で横書きが。

『翼のメモだけでは不安なので、念のために私も同じメモを書きました。遼平、すみませんが頑張ってください。……時雨』

さすが時雨！ わかってんじゃねーか、これならわざわざ引き返さなくても。

『買ってくる品。 西瓜、南瓜、木木橋、魚京』

……やっぱり読めねえ……！！

嫌がらせか！？ 嫌がらせなのかコレは！？ 俺が何したってんだよ……！！

結論。
やっぱり俺は、
人間が嫌いだ。

第一章『優しき獣』（2）

「くっそ、西のツメって何だよ……」

暗い路地裏、廃棄されて積まれたタイヤの上に座って、俺は必死に考えていた。

『西瓜』、ニシ……ツメ？ これって食い物か？ いや、武器？
何かの秘薬！？

おいおい、なんかファンタジーな方向にいつてるぞ。よく考える俺、ココは東京裏社会渋谷、そして俺みたいなの十三の人間に頼める品だぞ？

翼のメモは論外だ。微塵も参考にならない……どころか、余計混乱させる。

「他のもよくわからねーモノばっかだし……。『南ツメ』と『木木』に、よく読めねえヤツ」と『魚の京』だと？ 謎解きか！？」

なんとなく、この『西瓜』ってのと『南瓜』は似たモノだと思う。だが『木木橋』と『魚京』って……？

何なんだよ、ツメと木と魚って……なんの共通点もねえじゃん。金が渡されたってことは、コレって店で売ってるモノなんだよなあ？

「だあああーっ！！ わからね ……！！！」

そもそも、なんで俺はまだ所属してもいないグループの為に動かなきゃならねえんだ？ そうだ、無理矢理スカイの居住地で生活させられているが、俺は好きで暮らしてるわけじゃない。スカイのメ

ンバーも、俺を胡散臭そうな視線で見てやがるし。

じゃあなんでだ……？

……アレだ、あの翼って男のせいだ。俺は人間が嫌いなのに、あいつと居るとなんかペースを崩される。あの空気が……なんか合わねえ。

『リヨーヘイ、困ってるの？』

『あー、いろんな意味で、な。なあカスト、ポルック、お前らも翼を知ってるな？』

『うん、ツバサって名前なのはリョウヘーから聞いたんだけどね。』

ツバサは、随分と前からこの路地で生活してたらしいよ』

『僕達のお父さんやお母さんが言ってた。ツバサは、安全なニンゲンだって』

『そりゃ、あんな情けないヤツじゃあ蝙蝠に害は成さないだろーな』

『『違うよ、リヨーヘイ』』

二匹の声が重なる。それぞれ両肩に留まっているので、サラウンドで聞こえた。

『ツバサは、動物を傷つけないんだ』

『ツバサは、ニンゲンを傷つけないんだ』

『『《護る力》を持った、ニンゲンなんだ』』

《護る力》、ねえ……。

そうなら、俺とは正反対の人間だ。《壊す力》を持つ俺とは。

俺は、何も護れない。

俺は、何も護らない。

俺は、……誰からも護られない。

「……それなら尚更、俺がココに居るのは良くねえな」

このまま金を持ち逃げして違う街へ行こうか、なんて考えてた、そんな時だった。

『音楽』、と言うにはあまりに陳腐なただの音の連続が、聞こえてきたんだ。

無視しようとしたが、あまりに下手な音でムカついてきた。

その音は、俺が居た場所より更に更に暗い奥の路地から。

「鐘一つ……どころか、鐘を鳴らすレベルでもねえな」

そいつらは、角を曲がったすぐの所に座り込んでいた。木の横笛を必死に吹こうとしている女の子供と、よく見りやさっきの緑シャツのガキ。

「あ……」

ガキが、俺を恐怖の目で見上げて笛を止めた女子の後ろに隠れた。女子の方は、不思議そうにガキと俺を交互に見て。

「どうしたの、拓。あなたも、誰？ どうしたの？」

「別にどうってことはねえよ。ただ、下手クソな音が聞こえたからやめろって言いに来たんだ」

「なつ、鈴姉ちゃんの笛は下手じゃないもん！ お父さんからもらった笛なんだもん！」

背を向けて立ち去ろうとしたのに、不覚にもその言葉に止まっちゃう。その時の感情が何だったのか、俺の頭では理解できなかった。

「……笛、貸してみ？」

「え、ええ」

手渡されたのは軽い木製の横笛。何度か削った跡を見ると……その父親の手製か。

笛自体に問題は見られねえから、問題は吹き方、だな。

俺が何度か試して吹いているのを、二人は驚いた顔で見ってくる。

なんか吹きづらいから、「なんだよ」と訊くと。

「え、と、コウモリがずっと肩に……お友達なのかな、って」

「は？ こいつらは、その……知り合い、ってとこだ。こっちがカスト。で、こっちがポルツク」

今の俺の声はわからないはずなのに、カストとポルツクは指差されて嬉しそうに二人のもとへ飛んでいく。人間への警戒心が無さすぎだと思いが、まあ大丈夫だろう。

「私は、鈴。そして弟の拓。あなたは？」

「……遼平」

「鈴姉ちゃん、この子僕の肩に留まるんだ！」

姉の鈴が、「よかったね」と拓の頭を撫でる。鈴の歳は俺と同じ十三だと、教えてくれた。

姉弟、か……思い出せば傷つくだけの、そんな記憶が蘇っちゃう。もう捨てるんだ、あんな過去は。

「遼平も、スカイなの？」

「違えよ。ただ、翼に用事を頼まれてな」

「翼兄ちゃん！？ スゴイヤ、お兄ちゃんは翼兄ちゃんの用事なんだ」

「そんなにスゴイのか、翼は？」

俺の問いに、鈴は何かを思い出そうとしている。そして、少しの間を開けて。

「確か……めーふの門番、《けるべろす》とか呼ばれてた気がするの」

あいつ、どっかの門番なのか？ けるべ……?? 変な名前つけられてるんだな。

そんな会話をしているうちに、俺はこの笛の吹き方を調べ終わった。

二人がせがむので、試し吹き代わりに何か演奏させられることになったが。

俺が知ってる簡単な曲といたら…… 《祖愛歌》ぐらいだ。

其の旋律、一族に伝わりし摇篮歌。

けれど俺は知らない、この曲の本当の旋律を。

歌われたことなど、無いのだから。

頂点に昇る太陽が、こんな暗闇にも光を注ぐ。穏やかな風が、三人の髪を揺らして去っていく。

ただただ、ゆっくりとした時間が旋律と共に流れていた。

鈴と拓は幸せそうな笑顔で聴いているが、演奏している俺は何故

か暗い表情をしていたと思う。

……俺じゃ、ダメなんだ。

不自然な部分で曲を止めたので、二人は俺を不思議そうに見つめてきた。笛を、鈴に返す。

「どうしたの？ なんでやめちゃうの？」

「もう充分試しただろ。あとはお前が吹け」

「でも、私どう吹いたらいいの……」

「とりあえずしっかりとした音を出すポイントは二つだ。息を吐く穴へは、真上から吹かないこと。斜めの角度から吹け。息は、《多く》出すんじゃない、《速く》出すんだ」

最後のポイントは……言うまでもないだろう。

音楽は、歌う者が誰か……何を想って歌うかが、一番なんだ。これは俺じゃダメなんだ。

姉が演奏する音楽なら、どんな音であろうと弟にとってどんな歌より最高のモノになる。……そう思うだけで、本当はどうなのかはわからないが。

《祖愛歌》は、蒼波の親が子供へ歌う曲。けれど俺は……歌われたことなど、一度も無い。

……当然だ、俺は《望まれない存在》なのだから。

「ありがとう、遼平！」

「……ああ。親父からもらった笛、大事にしるよな」

こんなトコにいるぐらいだから何か事情があるに違いないが、き

つとこいつらは父親に愛されていたんだ。家族に……愛されてんだ。

なあ……『愛される』って、どんな感覚なんだ？ 『愛』ってどういう意味なんだ？

俺には『愛』は望めない。けど、知りたい。でも、訊けない。

「お前らスカイなんだろ？ こんな所に居ねえで、もっと安全な場所です」

スカイのメンバーである証、二人の手首の青いリストバンドを見て、俺は路地の入り口を指す。どんな事情があるにせよ、ココはあまり安全そうではない。

だが俺の言葉は悪い予感の中で遮られることになる。カストとポルックも反応した。

『リョーヘイ！ ヤな感じ……！！』

『わかってる。左、だな……』

姉弟を俺が曲がってきた右角へ押しやって、俺は左の路地を睨む。

「スカイのガキ、見つけ」

下卑た声色とその表情。俺が舌打ちするのは、状況がマズいからじゃない。目の前に立つヤツらが、心底気に入らねえからだ。

「なんだよ、てめえら」

「怪しい人間じゃないぜ、『スカイ』と和平条約を結んでるグループの人間だ」

「……で、その怪しくない人間が、何の用だよ？」

細い路地の先にうごめく影へ、声を投げかける。『怪しくない』

だと？ ふざけんな、隠し持ったナイフの音が丸聞こえなんだよバカ。

明らかに成人である男達は、気持ち悪い猫なで声で語りかけてきやがる。

「実はさ、ちよーつと俺達についてきてほしいんだけど」

「なんで？」

顔を覗かせた拓が、いたって不思議そうに首を捻る。そう言うてる間にも、男達は距離を狭めてきて。

「それはあ……………人質になるからだよお！！」

「ちっ」

案の定、つてやつだ。手を伸ばしてきた男の上半身を潜り、鳩尾に俺の左拳を埋め込む！

「鈴、拓、逃げるっっ！」

「でもっ！」

「うっせえ！ カストとポルックについて行け！」

俺の一撃で昏倒した男の身体を奥にいたヤツらへ投げ飛ばして、一刹那だけ振り返る。

『カスト、ポルック！ そいつらを安全な場所まで誘導してくれっ』

『わかったよっ、リヨーヘイ！』』

二匹の小さな蝙蝠が、二人の服を引っ張って角を曲がって走らせる。

これでいい。後は、

「ガキ一人で俺達相手にするつもりかよ！ 頭の回らねえガキは扱いやすいなあ！」

「はっ、残念だったな、俺はスカイのメンバーじゃねえよ。俺を捕

まあたところで人質にはできねえが

「

俺が青いリストバンドをしていないのに気付いた野郎共が、「殺せ」だの「死ね」だのうるさい。

「てめえらごときに、この俺様は億に一も無く捕まえられねえよ。かかってくれれば？ ザコども」

俺の宣戦布告は、相手の血を頭に上らせるのに充分だった。

第一章『優しき獣』（3）

「本気出せよっ、つまらねーだろ！」

俺より背の高い男の顎を蹴り上げてから、そいつの身体を踏み台にして跳躍、奥の男に踵落としを喰らわす。

まだ身体の小さい俺は、小回りが利くから俊敏性はあるが……一撃があまり重くない。よって、一人あたり三発くらい攻撃しねえと倒せないわけだ。殺すなら、その倍が必要。

面倒くせえのに……それでも心のどこかで、快感を抱いている俺がいる。人間を倒す快感を……。

「なんだよ、このガキっ」

「手加減してんじゃねえっ、ぶっ殺せ！」

「し、してねえよ、手加減なんて……っ」

細い路地を、一人も俺の背後に回られることなく潰していく。俺の拳が紅で塗られるのは、刃物で切られた腕が血を流すから。

俺の血……人間から忌み嫌われた力の宿る、俺の紅……。

そんなことを刹那思ったからだろうか。気絶させるだけじゃ生温く思い、手加減をやめて本気で殺すことにした。

人間が生きるのに、意味も価値も存在しねえんだ。だから、その命を消すことに意味なんて、無い。理由も、要らない。

邪魔なら潰せばいい、目障りなら消せばいい。俺が最も憎んだ種族を。

人間がギリギリで微かに聞き取れる音波を、路地に響かせる。ただ使い慣れてねえ技だが……こいつら潰すのには充分だ。

高音の周波数を維持している時間は隙が多くなり、そこを狙われて傷が増える。だが、あと二十秒……十秒……五……、

「ひれ伏せ、ザコども」

俺が見据えた男達から順に、膝から崩れてアスファルトにへたり込み、こちらに頭を垂れる姿になる。驚愕の表情をしながら。

まあ、それを見下ろしている俺も、ビル壁に寄りかかった体勢なのだが。

いくら蒼波の下級歌と言っても、まだ超音波を使い慣れていない俺にはキツイ。確か名前は、『呪縛波』……耳の奥の三半規管って部分をマヒさせる技、だったか？ よくわかんねーけど、そこがマヒすると人間は身体のバランスがとれなくなるらしい。だから、こんなダサい姿勢になるわけだ。

当然俺の耳にも聞こえるわけだから、俺自身にも効果が及ぶ。なんでも、何度も使用していれば耳が慣れてくるらしいが。

顔面蒼白になって、突然の身体の異常に焦っている男どもが、見ている可笑しい。醜い動物ども。

だがやがて俺のマヒが治った頃には、一番俺の近くにいたうつ伏せ状態の男の首を掴み上げる。

「や、やめ……っ！」

「命乞いか？ 本当に人間らしくて……ぶっ殺してえな」

たった十三にして人の首を絞め殺せるだけの握力を持った俺の手。発達しているのは耳と喉だけじゃない……生まれながらにして、常人とは違う《破壊》の身体。

俺に存在しないモノ。

常識。

権利。
普通。
意味。
価値。

……求めて手を伸ばしても、俺の手自身が握り潰して壊しちまった、一度は望んだモノ達。

《求めるコト》自体が間違いだと気付いた時、それは子供の俺にとって、あまりに早すぎた。人間を……人間である俺自身を嫌ってしまうほどに。

「死ねよ」

この言葉にさえ、意味は、無い。

指に全握力をかけるのに、二瞬。
ビル風だろうが、疾風が俺達をすり抜けていくのが、一瞬。

そして、大きな手は強く、握りしめる。

第一章『優しき獣』（4）

そいつ自体が《疾風》だったのだと思わざるを得ない、そんな突如の出現。

「……………何してんだ、てめえ」

「ここまでだよ、遼平」

その大きな手で、俺の腕を横から握った翼。全く痛くはないのに……………指に力が入らねえ。

気配が……………俺の耳が音を感じなかった、この男は何者だ？ どんな速さで……………。

そして俺を真っ直ぐ見つめる瞳は、決して怒りや責めの感情ではなく、哀しみと俺の知らない何かの色。その感情は……………何だ？

「殺す必要は無いよ、彼らには俺がもう二度とこんな真似をしないように言っておくから。だから、ね？」

「知らねえぞ……………その甘さが、後にてめえの仲間を傷つけたとしても」

「大丈夫、大丈夫だよ。その時は俺が、護る」

随分と呑気な笑顔をされて、なんかやる気が喪失したので男の首を放す。とつくに恐怖で失神していた男を、わざわざ翼は丁寧に路地に寝かせた。

「鈴ちゃんと拓君が慌てて俺のところに来たから何事かと思って焦

ったよ。えーっと……コレ、どうしたの？」

その口調はいつもの翼に戻ってる。苦笑いで、呻きながらアスファルトに這いつくばってジタバタしている男どもを指差す。

「……」

説明するのは容易、理解されるのは困難。俺が『蒼波』の名を口にすればいいだけのこと。

「遼平、この人達に何したの？ 何か変……」

「そ、れは……」

なんでだ、なんで言えない？ ただ名乗れば、それでいいのに。それで、俺はまた独りになれるのに。

「……っ!？」

いきなり目眩がして、立っていらなくなる。まだ『呪縛波』の反動が残ってたのか……くそっ、そろそろ《音》の効果が切れるのに……!

「遼平っ？ どうし

」

「翼、後ろっつ!」

不完全な呪縛は、既に効果を切らした。男どもは立ち上がって、背中が無防備な翼に跳びかかる!

その瞬間、何かの光を見た気がした。銀の煌めき、獣の瞳……? ?

地面に膝をついた俺の前で、宙に舞っていた人間の身体が落ちていく。もう、微動だにしない……だが、死んでいるわけではない。

「グループ『フレイム』、和平条約を結んでいた俺達『スカイ』に敵意をもって攻撃してきたと確認し、和平を破棄をしたものと見、

「ここから排除するよ」

翼はその場から全く動いていないのに、動いていないように《見えたと》のに、明らかにあいつらは翼にやられたんだ。何故なら翼の手が銀色に……長袖の部分から鋭いクロウが見えていたから。

鋭利なかぎ爪は闇の中で銀の光を帯び、グループ『フレイム』に振り向いた瞳は獣の怒り。それだけですくんでしまう、男ども。

「遼平つ、翼！」

駆けつけてきた時雨は、場の状況を瞬時に把握して薙刀を構える。だが、時雨が薙刀を使用する必要は無かった。

ふつと俺の身体が持ち上げられ、瞬間移動のような素早さで時雨のもとまで運ばれる。翼が、「ちよつと遼平をよろしくね」などとやっぱり呑気な言葉を残して、俺は時雨に背中から抱かれる体勢に。

「……俺、少し怒ってるんだ。逃げたほうがいい」

言葉だけ聞いたら、バカバカしいくらい間抜けなセリフだろう。だがその声色が、翼の発する《気》が、口を噤ませる。その背に感じるのは恐怖じゃない、驚怖。

怯えて逃げていく奴が半数、狂ったように襲いかかってくる奴が半分。翼は狭い路地に両手を大きく開いて、かぎ爪の部分を両壁に引っかけ、全体重をかけて手足をアスファルトから弾く反動で、消える。

長身の人間には手の甲で壁へ叩きつけ、殴りかかってきた奴の拳はクロウで受け止め、片方の拳で殴り飛ばすっ！ 小柄な俺と大差ない俊敏さで、圧倒的な力の差。俺とは違う、強い力。

「時雨……翼は一体……」

「冥府の門番ケルベロスという名を冠した、スカイ最強の人物です。彼が負けたのを見たことはありません」

ああ、鈴も何か同じようなこと言ってたな。どっかの門番とか…。

「じゃあ、普段は呑気な顔してるくせに何人も殺してるんじゃないか」

そのくせ俺を止めやがったのか、アイツは？ ムカつく野郎だな。

「違います、遼平。彼の《冥府の門番》という名は、《味方も敵さえも冥府に逝かせない》という意味なのです。生者に、その門をくぐらせない番人」

「殺さないってのか……？ この裏社会でっ？」

「私達スカイは、《秩序と平安》を求めるグループですから」

時雨の笑顔の言葉が終わったと同時に、翼は最後の一人を昏倒させていた。

誰一人として、血を流してはいなかった。

それは俺には無い《強さ》。

それは俺とは違う《力》。

それは、俺が手に出来ない《光》。

「ごめんね……もう、来ないでね……」
自分が気絶させた相手に、聞こえないのをわかっていて、それでもアイツは謝っている。

なんでそんな悲しそうな顔をする？
なんで泣きそうな瞳になる？
なんで謝る？

俺には、わからねえ。

振り向いて俺達の近くへ帰ってきた翼は、またあの呑気な笑顔に戻ってやがった。クローも、長袖に隠して。

「遼平、ケガとかしてない？ ごめん、俺が用事頼んだりしたから

……」
「なんでだ……!!」

俯き、拳が勝手に震える。俺の声は完全に憤っていた。

「あつ、ごめん、ホントにごめん！ でも、あれには意味があつて
」

「違えよっ！ なんててめえはそこまで人間に甘いのかって訊いてんだよ!!」

言葉と同時に腹部へ突き出した拳を、翼はあえて避けなかった。

わざと俺に、殴らせた。俺の感情を、黙って受け止めた。

「なんでだよ……俺は嫌いだ、大嫌いだ、人間なんか……!!」

「……遼平は、人間が嫌い？ 俺達も嫌い？」

「っ、そうだ、お前らなんか……大嫌いだっ……俺は……俺は
っ」

なんでだよ、なんで頭がぐちゃぐちゃになっっていくんだよ……なんでこんな寒いんだよ……なんで俺は、生きてるんだよ……。

「大丈夫、大丈夫だよ、俺達は遼平が大好きだから」

何言ってるんだよ、コイツ……俺は『嫌いだ』って言ったんだよ……

……気安く頭に手を乗せんじゃねえよ……。

今更気付いた。こいつらは俺に、同じ目線で語りかけてきていたことを。こんなのは何年ぶりだ？ 俺を《人間》として接してきたヤツは。

殴られ、貶され、蹴られ、裂かれて、何度も殺されかけた。俺の唯一の肉親は、この身体に癒えることない多くの傷を刻んだ。《俺》という存在は、誰からも望まれなかった。当然、俺を好む人間などいるわけがなかった。

なのに、なのに……お前ら何なんだよ。

「怖くないんだよ、人間は。だから、怯えないで」

「俺が怯えてるだど！？ ふざけんな、俺は人間が憎いだけで……！」

「でも、鈴ちゃんと拓君を逃がしてくれたよね？ 俺が襲われそうだった時とっさに呼んでくれたよね？ それに……言ったよね、『知らないぞ、後にお前の仲間を傷つけても』って。遼平は優しい人じゃん」

「なっ、違……っ」

違う……違う、違う違う違う……！！

俺は優しくなんかない！ 『優しさ』なんて知らねえんだから！ 優しくされたことなんか、無いから……。

もう身体に異常が無いのに、今度は心がマヒし始める。両膝をア

スファルトについて、音を拒絶したくて耳を両手で塞ぐ。

「違……ちが……お、れは……『優しさ』なんて知らねえ……ニンゲンが……!!」

「大丈夫、大丈夫だよ。俺達は遼平を独りにしないし、憎んだりしない。だから無理しないで？ 同じ種族を憎むことは、とつても辛いことだから。『優しさ』がわからないのなら、俺達が必ず教えてあげる。ね？」

時雨が俺の両肩をしっかり掴んで、耳を塞いでいた俺の両手は翼に握られて力を無くしていく。

温かい………人間の身体って、こんなに温かいモンだったのか……。もう、思い出せねえよ……。

「俺は、俺の名は

《蒼波》 遼平……」

もう耐えられなかったのだと思う。こいつらを騙したような気がしていたから。

この名を口にすれば、人間は俺を独りにして去っていく。異常な血と力を恐れて。でも、もう、いいんだ。

こいつらには充分世話になった。何故か、お前らには嘘つきたくねえんだ。

だから、
お別れだ。

第一章『優しき獣』（5）

「ソウ……ハ？ まさか、『音の民』の、蒼波なのですか！？」

「……ああ、そつだ」

時雨の驚きの声も、無理はない。『音の民』は、おとぎ話に出てくる一族。歴史の裏側に存在したという、実在は眉唾物な先住民族。「え、何？ ソーハって何？？」

独り、翼だけはわかってない。まあコイツ、ひらがなさえ知らないヤツだからな……。でも、いざ説明しようとするとな面倒だな。

「突然変異とも言われた、身体能力、特に聴覚が異常に発達した家系……今となつては伝説の『音の民』。超音波を操ることのできる音を統べる一族。それが蒼波一族です」

当事者の俺よりも、時雨の説明の方がわかりやすい。翼は俺をまじまじと見つめ、しばらくして言葉を発しようと口を開いた。……何を言われるか、予想はつく。

「へえ〜。じゃ、よろしく、遼平」

「………は？」

「え、ちよ、今なんつった？」

「ん？ いや、『よろしく』って」

いや、そつじゃなくて！ どーしてここまでの話で『よろしく』

になるんだよ!?

「お前聞いてたたる!? 俺は蒼波の人間で……」

「うん、ちゃんと聞いたよ。だから『へえ〜』って納得したじゃん」

「一言!?! しかも『へえ〜』ってなんだ!」

「ふえ?? どうして怒ってるの、遼平?」

目の前の男は、本気でわからない仕草をしやがる。明らかにおかしいだろっ、その反応は!

「俺は異常なんだぞっ。なのに『よろしく』って……!」

「だって、約束したもん。遼平に『優しさ』を教えてあげるって。

それと遼平がソーハなのって、関係あるの? 時雨、どうなの?」

「特に支障をきたす原因にはなりませんね。むしろ蒼波一族は、昔より精神の発達した感受性が豊かな一族と聞きますから」

時雨の穏やかな笑顔と答えを受け取り、翼も微笑む。「じゃあ決まりだね」と、とても嬉しそうな言葉を。

「お前ら……何とも思わないのか? 俺の力を!」

「仲間の力なのです、心強いではありませんか」

「スゴイ力だなくって思ったけど? それが何か悪いの?」

……なんか、わかってるヤツとわかってないヤツがいる気がする。ただどどっちも、《俺》を否定しなかった。

なあ、もしかしたらココには……?

『まさか。ありえねえ』

でも、こいつらは……。

『わかっていないだけだ、俺の本性をわかっていないだけだ』

知りたい、欲しい、求めているだけなんだ。
『……俺は《破壊者》だぞ、欲すれば……きつとこいつらを壊し
ちまっ』

それでも！ 一度だけでいい、俺は知りたい！ 優しさを……っ！

『知らねえぞ、どんな後悔が待っていたとしても』

『お前の……《俺》の辿る運命は、《破壊》なのだから。それは
変わることはない定め』

そんな闇からの声を聞いても、俺はまだ僅かな希望を持っていた。
定めなど、変えられると。俺はまだ幼すぎた。

「平、遼平？ どうしたの？ 怒っちゃった？」

我に返ると、心配そうに翼が俺の顔を覗き込んでいた。顔を上げると、時雨も不安な顔をしていて。

ああ、本当に、こいつらは俺を想ってる……《俺》という存在を、
気にかけてくれている。さびついた記憶の奥底、かつて《》が
俺をこんな眼で見えてくれたように。

「……………戻ってやるよ」

「え？」

「戻ってやるよ、このお使いが終わったら、お前らのトコへ戻る」

翼に握られた手が、熱くなる。眼を合わすことが出来なくて、わざと逸らした。

「……うん！ ずっと待ってるよ、遼平が、戻ってくるのを」
破顔するほど嬉しかったのか、抱きついてくる。

「こら抱きつくくなっ、野郎に抱かれる趣味はねえ！」

「痛っ、ほ、本気で殴らなくても……」

翼の眉間に拳がクリーンヒット。頭を押さえてうずくまる、『ス
カイ最強人物』……っばいモノ。

「あつ、とところで翼、時雨、お前らのメモ」

「「あ」

俺の一言に、何故かビクつく二人。その反応に訝しさを覚えた。

「つ、翼、私はあの準備があるので、先に帰ってますねっつ」

花の如き微笑みを音速で振り返らせ、着物姿にしては異様な速度
で時雨は去っていった。

「ああつ、ズルいよ時雨！ 俺も手伝うっ！！」

「待てこの逃がさねえぞ、つ・ば・さあ！？」

「うわああつ、離して遼平っ、一生のお願い！ 殴らないでっ、蹴
らないでっ、話せば人はわかりあえるからああっ！！」

数分後、戦闘でかすり傷一つ作らなかつた男は、俺の手によって
ボロボロになっていた。

全ては、ひらがなが書けなかつたばかりに。

第一章『優しき獣』(6)

「ううっ、ヒドイよ遼平……アレにはちゃんと意味があったのに……」

涙声で呟く男に、再び情けなさを覚える。なんだかなあ……俺、こんなヤツに諭されたのかよ……。

「何が意味だ。あんなワケわからん暗号みたいな文字、意味以前に誰が読めるかつ」

「……え？」

「な、なんだよ」

俺の言葉を聞いて、しゃがみこんでいた翼は顔を上げる。何度も瞬きして、俺をじーっと直視してきやがった。

「……遼平が怒ってたのって、俺の文字のせい？」

「それ以外に何があるんだよっ」

「え、じゃ、じゃあ、全然お使いしてないの!？」

「あ……当たり前だろうっ、こんな読めねえメモ渡されたって……!」
翼の眼前に暗号と化したメモを押しつけて、言う。それを受け取った翼は、呆気にとられた顔をして。

「読めない……? ちゃんと書いたじゃん、『すいか、かぼちゃ、りんご、くじら』って」

どう読んだって『すーいや、やば5や、1ん二、くしち』がそれになると思えないが、どうやら翼が言った《意味》とは違う論点らしい。

いや、待てよ……。

「オイッ！ それって全部売ってる季節が違うじゃねーか！ こんなモン、揃わねえだろ！」

「えっ、えっ、遼平は最初っからそれで怒ってたんじゃないの！？ 俺達がわざと揃えにくいお使い頼んだから……」

わざと揃えにくいお使いを頼んだと……？ いや、それ以前の問題に引っかけた俺が言うのも何だが、なんでそんなこと……。

「俺が……邪魔だったのか」

俺がスカイにいと不都合なコトがあったのだろう。簡単に言えば、邪魔だったんだ、俺は。

やっぱり、結局、《俺》という存在自体は、何かと邪魔で……。

「違うよ！ 誤解しないで、あのねっ、」

「ハツキリ言えよ！ 俺なんか気にしなくて、お前らは平和にやっていけんだから！ お前らの邪魔になんか……なりたくねえんだから……」

「遼平……」

なんでだろう、俺は他人の迷惑なんかかえりみない性格だったはずなのに、なんでこんなこと言ってるんだろう。なんでコイツに対しては言葉が出ていくんだろう。

『『リヨーヘイ、ただいま』』

「カスト、ポルック？」

羽ばたき方から、二匹が疲れてるのがわかる。そりゃ、昼間っから遊んだ拳げ句に人間を誘導させちまったからな……。

両手を掲げて、二匹を腕の上で休ませる。

『悪かった、疲れたろ?』

『でも、リョーヘイ無事、良かった!』

『リョウヘーは、疲れてない?』

酷使させちまった俺の心配をしてくる、幼い蝙蝠。細めた瞳で、
『ああ、平気だ。ありがとな』と小さく返事をして。

「……家族、みたいだね」

壁にもたれて座り込んでいた翼が、ふとそんなことを言う。

「な、なんだよいきなり」

「いや、遠平の眼がすごく優しくかったから。大切な家族なのかな、
つて」

「家族なんか……いらねえよ」

カゾクという音に一瞬で、捨てたはずの記憶が蘇る。また激しい
憎悪の感情が湧いてきそうので、自分でそれが怖かった。

「一度でいいから……俺は本当の家族に会いたいな」

「翼?」

「俺つてさ、物心ついた頃から裏路地に独りだったんだ。たぶん、
捨てられたんだと思う。明日死んでるかわからない社会で、ひたす
らに生きることを望んだ。今じゃ、スカイのメンバーは全員家族
だけだね」

「お、それは……お袋に……」

「いいよ、無理しないで。裏社会に……スカイにいる人は、みんな
ワケありだもん。でもみんな、明日を生きようとしてる。だからさ、
」

言葉を句切つて、座った体勢のまま俺と視線を合わせた。

「たとえ誰だとしても、命は大切にしてください。人間は弱いかもしれない、

けど、命を大切にする人には、《人間の》強さが宿るから」

それが、お前にあつて俺には無かつた強さなのか？ 俺も手に出
来るのか？

まるで俺の心の疑問が読めたように、翼は笑顔で頷いて。

「大丈夫、遼平もきつとわかるよ。《優しさ》の力、きつと出来る」

「さてつと」なんて言いながら立ち上がった翼は、夕暮れで赤く
なつた空を見上げて何かに頷く。

「遼平、時雨の花屋に戻る！ もう大丈夫だと思つから」

「は？ だから、俺が邪魔ならもうスカイには」

「誰も遼平が邪魔なんて言つてないよ！ 一生のお願いだから、来
てよ、ねっ？」

「……まゝたお前の『一生のお願い』、かよ。もー少し考えるよな、
翼。お前の一生何回あるんだ？」

呑気で満面の笑顔に脱力させられて、俺は仕方なく連行される。

なんで、俺はコイツといるとペースを崩されるんだろう。

闇ある所に光が輝き、光によって闇が増す。

共鳴し、依存しあう二つのカケラ。

……俺がそのことに気付くのは、もう少し先の話だった。

第一章『優しき獣』（7）

張り裂ける音と、直後に宙を舞うモノ。

「「遼平、おめでとう〜!!」「」

「……はあああ!?!」

時雨の花屋に戻った途端のこの光景に、俺は固まらざるをえなかった。

朝までは至って平凡だった床の間が、幼稚園のお遊戯会のような飾り付けをされていたからだ。しかも迎え入れた時雨と、一緒に入ってきた翼が同時にクラッカー鳴らしやがった。

「驚いたっ？ 遼平、驚いた!?!」

「遼平、何か顔色が悪いようですが……どうかしましたか？」

左右から顔を覗き込んでくる男女に、俺は口を金魚みたいにパクパクさせるだけ。『言葉を失う』っつーのは、まさに今のことだ。

事態把握のために、俺は深呼吸をして。

「落ち着け、落ち着け、冷静になれ。落ち着けば、きっと何かが聞こえるはずだ、うん、きっと今なら神の声っばいモノが……」

「つ、翼、どうしましょう、遼平が独りで嘯いてます……！」
「やっぱり時間稼ぎが無茶なお使い頼んだから怒らせちゃったのか
なっ？　なんかオーラが黒いよ遼平っ！」

「……えええーいつ、やかましいぞバカ！　何だコレは!？」
飾られた空間を指差し、俺は翼に詰め寄った。それを聞いて、翼
はきよんとして。

「何って、遼平の歓迎会」

「何の歓迎会だ!？」

「遼平がスカイに入った、お祝い」

「なんでこんな真似を!？」

「いや、スカイに入った人には全員やってるし」

荒廃した闇の世界、非合法が行き交うこの裏社会で、歓迎会だあ
!？」

ど、どこまで平和ボケしてんだこのグループ……!

「あ、忘れていました、遼平、リーダーから伝言があるのです」

「リーダー？　スカイの？」

まだスカイのリーダーを見たことがない。メンバーの話だと相当
多忙な人物らしいが……。

につこりと頷いて、時雨はその驚くべき伝言を告げる。

「蒼波遼平、今日からあなたに、スカイ幹部の一員になってほしい

そうです」

「な……っ、なんだよソレ！ 俺、そいつに会ったこともねーんだぞ！？」

「リーダーは、ちゃんと遼平の動きを観ていたのですよ。今日一日の姿勢から、あなたを幹部に任命したいと」

スカイのリーダー……意外とヒマ人？ ドコが多忙??

「良かったね遼平！ 俺達と一緒にだー！」

「よ、良かねえよっ、俺に何させようってんだ!？」

どこまでも嬉しそうに抱きついてくる翼を殴るのも忘れて、俺は叫んでいた。これは何かの陰謀に違いない。

「遼平の、好きなように生きればよいのです。私達と一緒に、生きてくれば」

それだけが《スカイである》条件なのだと、時雨は言った。そして《幹部である》条件は。

「俺達はスカイのみんなを……《家族》を護る役目なんだ。遼平はそれだけの力を持つてるって、リーダーが認めてくれたんだよ！」

《家族》を……護る……。

今まで何一つ護れなかった俺が、何もかもを破壊していた俺が、そんなこと……。

「暗い顔は無しだよ遼平！ よっし、そうと決まったらスカイ全員でお祝いだあ！」

「ま、待てよっ、俺はまだ……！」

「リーダーの命令は絶対だもんね。時雨、みんなを集めようっ」「そうですね」

俺を両脇から組むカタチで、翼と時雨は楽しそうにスカイ中央地に向かう。事の唐突さについていけない俺を引きずりながら……。

「そつだ遼平、鈴ちゃんと拓君ね、今日はお母さんの誕生日なんだ。何かしてあげたかったんだつて。あの子達はお父さんが亡くなつてから……遼平に、すつごく感謝してたよ」

「お前、まさかメンバー全員のこと知つてるのか？」

「もつちろん。《家族》の名前や誕生日はしつかり覚えてるよ」

「嘘だろ……全員で百人近いんだぞ？ その凄まじい記憶力を、識字能力に使えるよ。」

「さあ遼平つ、みんなに挨拶だよ！」

時雨がメンバーを集めてきたせいで、俺は一気に人間達に囲まれる羽目に。その中に、手を振っている鈴と拓を見つけた。

「ようこそスカイへ、新しい《家族》」

翼と時雨の、笑みの声が重なる。時雨から渡される、青いリストバンド。

俺に《優しさ》を覚えてくれる《家族》が、出来た瞬間。

面倒臭えが……護ってやるよ、何があっても、コイツらだけは。

第一章『優しき獣』終演

N E X T 第二章『M Y N a m

』e

第二章『My Name』(1)

第二章『My Name』

酸化した金属のツンとした臭いと、油のベタベタとした感覚。日が暮れるまで、私達はずっと工具道具を手放さなかった。

私は、この日々が好きだった。

「希紗、顔黒くなってるぜ」

「え、やだ、ドコ？」

ボロボロになった作業服で私は顔を拭う。指摘してくれた城二は、笑って私の顔を指差した。

「気にすることないわよ、だって希紗は全身真っ黒だもの」

「ははっ、そうだね、希紗はもう僕より黒いや」

少し距離を置いて作業をしていた二人も、顔を上げて笑う。摩耶と、黒人のキース。私は頬をふくらませて必死に顔を擦ってみる。

都内の廃棄工場側の、粗大ゴミ捨て場。すぐ近くにそびえ立つビルの群れ。私、安藤希紗と城二、摩耶とキースはいわゆる『表のストリートチルドレン』、みたいなものかな。ただ私の好きな事をしなくて、家も飛び出して。私達の夢、一流のメカニッカーになること。

私達四人は事情は違っけれどみんな同い年。みんな機械を扱うのが好きだから、まだ修理できそうなゴミをいじって直し、売って生活しながら、自分の腕を上げてる。

私の格好はもとは白かった、長袖長ズボンの作業服だ。今は真っ黒だけ。

「うるさいっ！ もういいわよっ」

三人が笑う。なんだかつられて私も笑っていた。

大好きだった。こんな生活がいつまでも続けばいいと、若すぎる私は裏社会で夢見ていた。

「なあっ、コレ見てみるよ！」

修理した機械を売ってきた城二が、遅く帰ってきたと思ったら、うかれてそう言い出した。その手には、最新型のディスクプレイヤー。

要は小型のテレビのようなもので、読みとり専用の端末だ。中にディスクまで入っている。

「どうしたの、それ？」

「東京駅の人混みの中でスツてきたんだ。ちよろかつたぜ」

「盗んできたのかい？ ダメだよ、返さなきゃ」

気が優しいキースが、首を振る。でもスリより、私が興味があったのは……。

「堅いこと言うなよキース。気にならないか？ コレ解体してみたい」

機械好きの私達は、まずそう思う。一体内部はどうなっているんだろう？ どんな部品が使われているんだろう？

「確かに、気にはなるけど……」

キースの心が揺れる。摩耶が最後に、もう一押し。

「ねえ、せめて中に入ってるディスクぐらい見てみない？ ちょっとだけ」

「う、うん」

「よし！」と城二が再生ボタンを押す。やがて小さな画面に明ら

かに欧米外人と思われる偉そうな男が映り、喋りだした。

「……え??」「」

私達には、何て言ってるかわからない。ようやくそれが英語だとわかる程度で、早口の男の言葉が聞き取れない。

「……まさか?」

唯一、キースだけが口を押さえる。真剣な顔で彼は男の言葉を聞いていたが、すぐに映像は終わった。

「キース、今の何て言ったの?」

「うーん、聞き取れたのはちよつとだけど……。なんか、『バベルの塔』とか、『EU連合』とか?」

「なんだそりゃ?」

「さあ?」とキースも首を捻る。四人そろって黒くなったプレイヤーの画面を見ていた時。

「おい、お前達!」

大人の声が出た。私達は弾かれたように声の方を見る。黒いスーツでサングラスをした怖そうな男の人達が、三人。

「何?」

「お前達、黒のディスクプレイヤーを知っているな?」

私達の顔にうつすらと冷や汗が伝う。城二がスツたコレ!?

「知らないわ、何のこと?」

私が一歩踏み出て笑顔を返す。口には、自信がある。

「そうか。おかしいな、あのプレイヤーには発信器がつけてあるのだが」

金属が落ちる音。振り返ると、城二がああプレイヤーを落としてしまっていた。起動しているのを見れば、内容を観てしまったのはバレる。戦慄が走る……!

「やはりお前達か。見たのだな。……消えてもらおう」
「っ!？」

大人達が一齐に拳銃を私達に向ける。そんなっ、いきなり!?
「希紗っ」

動けない私の前に、キースが飛び込んでくる。直後、彼と共に私は揺れた。

「キース!」

キースの胸に紅い点。その紅は段々広がって行って、彼の身体は力無く私に倒れてくる。撃たれた……の？

「きさ……、Weapon……」

「キース!? キースっつ!！」

キースにしがみつく私を、城二が強く引つ張る。次の銃弾が私達を狙っていた。キースを残して、私を引く城二と摩耶は走り出す。

「城二っ、キースが!」

「今は振り返るな!！」

城二は唇を噛んで激しい感情を堪えていた。大人達が追ってくるなか、細い路地を三人で駆ける。

銃声で、横を走っていた摩耶が倒れる! 城二は止まり、私の腕を離した。

「先に逃げる、希紗!」

「そんなことできるわけないじゃないっ!」

「行って、希紗……っ」

摩耶の微かな声。城二が追ってきた男に体当たりを喰らわせる。摩耶も血塗れの身体で大人の脚を掴んだ。

「お前の脚なら逃げ切れる! 行けえっ!」

涙が流れるのも気付かず、私は背を向けて走り出していた。

なんで、なんで、なんで!!!

どうしてっ、どうしてこんな事になったの……っ!!!

……銃声が響く。友の最期の叫びが、背後に遠く。

第二章『MY Name』(2)

「……まったく、こんなに買ってどないするつもりです？」

「いいじゃないか、私は趣味には目が無くてねえ」

賑やかな繁華街から少し離れた街角で、ちよつと浮いた二人組みが歩いていた。後ろで腕を組んで歩く小柄な老人と、その斜め後ろで荷物を抱えた金髪関西弁の若者。親子……には見えない。

「こないなモンで遊んでる暇なんてないでしょうに……」

「甘いね、私は毎日退屈でしょうがないんだよ。退屈しのぎにこんなコトしかできないのさ。あゝあ、愉快なことはないかなあ？」

その言葉を聞いて、若者は怪訝な表情で自分の抱えている荷物を見やる。チェスセットにジグソーパズル、スケッチブックと刺繍道具。いきなり呼び出されて仕事かと思いきや、彼はこの老人の趣味の買い物に付き合わされたのだ。

「君も今度一緒にどうだい？ なかなか楽しいよ」

「遠慮しておきます。ワイはチェスとか知らないので……大体、仕事がありますから」

「もー、相変わらず娯楽を知らないね。チェスは頭の運動になるんだよ？ 痴呆防止にもなるんだってさ、真、知ってた？」

「……社長、ワイはまだ二十一なんですけど……」

がつくりと若者は肩を落とす。チエスの痴呆防止効果は知らないが、今の自分にはまず必要無いだろう。それに、この老人だってボケるような人間ではないことを、彼は知っていた。

「あ、ねえねえ真、近道していいこうよ」

「へ？ …… やめておいた方が工工ですよ社長」

暗い裏路地を指差す老人に、若者は首を振る。ここ東京は、路一つで世界が変わる。老人が示した路は、明らかに裏社会に繋がっていた。まあ、彼らだって表の人間ではないのだが……。

「無駄に危険に近づかんでください。言いますやろ、『犬も歩けば棒に当たる』って」

「ふふ、真、君はその言葉の裏の意味を知ってるかい？」

「裏の意味？」

「世界には光と闇がある。表があるならば、必ず裏が存在する。一方だけを肯定することは不可能なんだよ」

「はア……？」

首を捻る若者に微笑み、老人はズンズンと裏路地に歩んでいってしまう。焦って若者もそれを早足で追う。大人五人の横幅くらいありそうな、広い路だった。

「『犬も歩けば棒に当たる』、主に不運な目に遭う事を指すね。でも、もう一つの方では幸運にぶつかる事を言うんだよ。……さて、私はどちらに遭えるかな？」

老人の楽しそうな声。若者は不満そうな表情で小さくため息を零す。

「社長、いっつもこんな事してはるんですか？」

「うん、そうだよ。不思議と私が外へ出かけると素晴らしい人材に出逢えてねえ。そうそう、この前さ、面白い子をスカウトしたんだよ。真も知ってるんじゃないかな、消去執行人、エクス」

二人の前に、丁字路が現れる。彼らの本社に行くには右に曲がれ

ば良いはず。老人が喋りながら一步曲がり角に踏み出した時。

「きゃあっ!」

「社長っ」

いきなり左から飛び出してきた少女に、老人は倒れる。だが若者は、倒れた老人と少女を飛び越えて少女が飛び出してきた左角に立った。

感じた気配通り、おそらくこの少女を追っているであろう黒スーツの男三人が駆けてくる。全員拳銃を突き出して若者ごと撃とうとしていた。

「なんかようわからんが、嬢ちゃん一人に大人げないやんか」

若者の片腕には一本の木刀。放たれた銃弾を、一発も後ろの二人に飛ばすことなく、若者は木刀で弾き返す。男達が怯んだ。

「……あんさんらが何モンかは知らんがな、ワイの目の前で傷つけさせへんで」

老人に絶対的な忠誠を誓う若者。そしてこの若者は、いきなり現れた少女も護ることに決めた。特に理由は無い。ただ、護りたいと思っただけから。

「関係無い人間はどけ! 死にたくなければな!」

「そりゃ死にたくはないけどなア、ワイこーゆーのは見逃せへんタチでな」

「ならば排除する!」

ちらつと背後を見て、まだ倒れた体勢のままの二人を確認する。傷一つ付けさせないことを決めて。

まず自分を狙ってきた銃弾を木刀の刀身で弾く。そしてそのまま

突っ込んで、一人目を薙ぎ払う！ 次に向かってきた弾丸は避け、ビル壁に突き刺さる。上空に跳んで、後頭部を切っ先で強打！ 最後の足掻きを見せた男には右脚で鳩尾を蹴り飛ばし、壁に叩きつける。

十数秒で全員が気絶していた。若者はまだ片腕に荷物を抱いたままの体勢で。

「……ま、こんなモンか。社長、怪我はありませんか？」

「うん、私はね。それより……」

老人は身体を起こし、自分をかばうように抱きついている少女を見る。長い茶髪に作業服を着た、まだ幼さの残る少女だ。

「嬢ちゃん、大丈夫か？ もう心配せんでエエよ」

「わ、わ、私……みんなが……！」

少女は、怯えきつた顔で若者を見上げる。若者は優しい笑顔で少女の背をさすって抱く。

「大丈夫、安心してエエよ。もう怖くないから……」

「みんなっ、みんなー……っ！」

若者にきつく抱きついて、少女はそのまま意識を失った。

第二章『My Name』(3)

目が覚めたら、私は知らない明るい部屋に寝ていた。柔らかいベッドから、上半身を起こしてみる。

「よかった、気がついたのね。気分はどう？」

白衣を着た女性が、背もたれのある椅子から立ち上がってこっちへ来る。私は不思議そうにその人を見ていた。

「私は……？」

「覚えてない？ あなた、霧辺君に運ばれてきたのよ」

みんなは……？

フラッシュバック。

反転、紅、銃声、銃声、銃声。

城二も摩耶もキースも、殺さ

。

「嫌っ、いやあああっ……！！！」

頭を押さえて、私は首を振る。銃声が耳にこびり付いて離れないっ。

嘘よっ、嘘よそんなの！ 受け入れられないっ、こんなのって！
だって昨日までみんな遊んでいたじゃない！ みんなで……みんな

なで！

「いいわよ、落ち着くまでここに居て。気持ちが整理できたら、社長に会いにいつてね」

保健室の先生みたいな女性は、優しく微笑む。

「社長つて誰？　ここはドコなの？」

まだ心の中はぐちゃぐちゃなまま。でも、違う事を考えることで、少しでも忘れたかった。

「そうね……詳しい話は社長から直に聞いたほうがいいと思うけど、何にもわからないと不安よね。ここはある警備会社なの。あなたが偶然会った高齢の男性が、私達の社長なのよ」

あの時ぶつかつたおじいちゃんだ。警備会社？

「社長室は、最上階にあるわ。わかりやすいから大丈夫」

お辞儀をして、私は医務室を出ていった。広くて明るい通路、青色の制服を着た人達。私の好奇心は、現実を忘れようと働いていた。エレベーターを見つけて最上階へ。

本当に社長室はわかりやすかつた。だって、エレベーターのすぐ前に一枚の扉があるだけなんだもの。何これ。

「社長、ワイは賛成できませんっ」

扉の奥から若い男の人の声が聞こえた。この声、どこかで聞いたことがある……？　私は、扉に耳をそばだてた。

「どうしてかな？　いい考えだと思っただけど」

「あの嬢ちゃんは、かなり精神的にシヨックを受けます。なのにつ」

……え？　もしかして、私？

「でも、表に返せるかな？　……それに、彼女には素質があるよ。」

気付いたかい、彼女があの時、とつさに無意識で私をかばおうとしたのを」

「……気付いてました。普通、あの状況下での行動じゃない。ですが、こんな社会になんてなるべく居ない方がエエのは、社長もわかってるでしょう!? あの子はまだ若すぎます。まだ……!」

「なるほど。じゃあ実際に本人に訊いてみようよ? 私達が話し合うより、その方が早い。……さあ、入っておいでよ」

私は跳び上がるほど驚く。バレてた!?

「し、失礼しまーす……」

ぎこちなく扉を押し開け、恐る恐る入室する。大きい机に椅子が一つの、簡素すぎる部屋が広がっていた。

椅子に腰掛けて微笑みながら私を見ているおじいちゃんと、振り返った若い男の人。あ、あの時の人達だ。

「社長、ワイは席を外します」

「ありがとう、真」

金髪の男の人は、私に寂しい笑みを見せて部屋から出ていってしまった。

「はじめまして、私は風籬。ここは裏警備会社『ロスキーパー』だよ」

「裏っ? ここは裏社会なの!？」

「そうだよ。ちよつと驚いちゃったかな?」

ちよつとどころじゃない。今すぐここから逃げたい気分だった。

でも、怖くて私はもう外へ行けない。逃げる場所も、無い。

「君にも色々事情があるようだけど、どうかな、ココに入社しないかい?」

につこりと風籬っていうおじいちゃんは微笑む。全然裏社会らしくない。

私は、どうすればいいの? 怖くて、どうしようもなく怖くて、裏社会になんていられない。でも、表だってもう嫌。全てが怖い。

「私、何も出来ないの……。みんなを置いて逃げてきて……。私はっ」
「出来るよ。君にはまだ、出来るコトがたくさんある。……。多くのモノを護れる。君の瞳の光は、まだ完全に消えていない。私はその可能性を信じているんだ」

真っ直ぐ、風籬のおじいちゃんは私を見据える。なんだろう、全部見透かされているような、不思議な感覚。

「裏社会でも……。いや、闇の世界だからこそ、そこには光があるんだ。もし良ければ、私に手伝わせてくれないかい、君の夢を」

私達の夢だった……。一流メカニッカー……。でも、私だけで……。

「選択権は君のモノだよ。生きる支え、私のもとで見つけてみないかい？」

「……。いいわ、やってみる」

だって他に道が無いじゃない。私の人生だもの、足掻くだけ足掻いてやるわ。

「嬉しいよ。そうだ、まだ名前を訊いていなかったね」

「私は、希紗。安藤希紗」

「そうかい。……。希紗、最後に一つだけ」

風籬社長の微笑みが薄れ、少しだけ真剣さが宿る。それだけで、私の身体は硬直した。

「……。何かを護ろうとした時、君はその代償に大切なモノを失うかもしれない。それでも君は、護るかね？」

大切なモノを……それは怖いけど、でも、私は。

「護るわ。《私自身》を失わない限りは」

「合格だね」

とても嬉しそうな笑顔になって、風雑社長は頷いた。

その後すぐに、私は本社の中で事務担当に配属されていた。本社からは一歩も出なくていい。

でも、あの日の事は毎晩悪夢となって私を襲い、作り笑いさえできなくなっていた。

第二章『My Name』（4）

私がロスキーパーに入社して一ヶ月ぐらい経った日の事。急に、社長から私に呼び出しが入った。小走りで社長室に向かう。

エレベーターに乗ろうとしたら、扉が閉まりかけて私は身体を挟まれる。

「痛っ」

中に乗っていた若い男の人が、無関心そうに私を見ている。その細い指はエレベーターの『閉』ボタンを押したまま。

「ちよ、ちよつと助けてよ！」

「……乗りたいのか？」

「この状況で『ちよつと顔をつ突っ込んでみました』って人がいると思うの!？」

私の言葉に何かを思うことなく、男は『開』ボタンを押す。全く興味無さそうな目をしてる。よく見れば、髪は淡緑色。……染めてるの？

「「……」」

なんか気まずい空気。私はこういうの大の苦手。なんだかこの人、すつごく近寄りがたいオーラをまとってる。でも顔はかなりの美形。まだ二十歳いってなさそうだけど……。

エレベーターは沈黙を破って最上階に着く。私達は同時に降りた。

……ん？

「……何故ついてくる」

「それはこっちのセリフよ！」

「俺はここに用がある」

「私もよっ」

「耳障りだ、一々大声を上げるな」

「何ですってえーっ!?!」

何なのコイツ！ かなりムカつくんだけどっ！ 偉そうにしちゃつて、腹が立つわ!!

「貴様は後にしろ。俺が先に入る」

「嫌！ 私が先よっ」

社長室の前で私達はいがみ合う。最後には二人同時に両扉を押し開けていた。

「やあ、待ってたよ。二人とも」

「へ？ コイツも私と一緒に呼んだんですか？」

「コイツとは何だ。貴様俺を侮辱する気か」

「あんたなんか『コイツ』で充分よっ」

「貴様、女だと思って聞いていれば勝手な事を……！」

男の瞳は殺気を放ち出す。私も負けじと抵抗してみる。風籬社長が軽く手を打って、私達を振り向かせた。

「うんうん、若くて元気で結構だね。希紗、澁斗、君達に今日は大事な話があるんだ」

「何だ。手短に話せ」

何その態度ー!?!

私の横の男は、社長に対して有り得ないぐらい偉そうにする。つていうか何様？ 私は色々動揺しつつ、社長の大事な話の内容が気になった。

「実はね、都内にもう一つ支部を作りたいんだ。あくまで試験的に、だけど。そこで、君達をそこに配属しようと思ってるね。どうか？」

「人事異動か。そんな事、社員に一々聞かずとも、社長の意向でなんとでも出来るだろう。何故俺達にわざわざ訊く？」

悔しいけど、私も同意見。『行け』の一言で異動なんてどうにでもなるはず。

「私は社員の意見を大事にしたいからね。……それと、重要な点がある。もう一つ」

風籬社長は人差し指を立て、澄んだ瞳で私達を見つめる。瞬間、何かに私は気圧された。

「君達の上司になる人物、部長について、私から言っておかなきゃいけない事があるんだ。……今から六年前になるかな、連続殺人犯『斬魔』の件は知ってるかな？」

私がまだ小学生だった頃の話だ。あの時、大人達がすごく騒いだ。結局、子供には何の被害も無かったけど。

「知ってますけど、それが何か？」

「うん、単刀直入に言うとな、君達の部長になる人間が『斬魔』なんだ」

微笑みでさらっと言い放った社長に、私は固まる。つまり。

「え、えええええー!？」

私の反応は決してオーバーではないはず。だって斬魔って死んだはずだし……しかもそんな人間が部長!? なのに、横の男は微動だにしない。混乱してるのは私だけ？

「……名前は？」

淡緑髪の男は、低い声でそれだけ言う。社長も何気なく返す。

「霧辺真」

「そうか」

いや、『そうか』じゃないでしょっ！ 一体どついう頭してんの！？

あれ？ 『霧辺真』？ どっかで聞いたことあるような……？

「話はそれだけか」

「うん、これで終わり。どう？ 二人とも行ってくれる？」

「……異論は無い」

それだけ言つて、男は部屋から出ていこうとする。社長が首を捻つて声をかけた。

「了承してもらつて嬉しいけど……澪斗、本当にいいのかい？ 殺人鬼だよ？」

その声が少し楽しげに聞こえるのは、私の気のせいなの？

「フン、俺を殺そうとした時は殺る。……それだけだ」

冗談を微塵も含んでいない声色で、男は出ていった。

「希紗、君はどう？」

「私は……」

殺人鬼と、あの男と、三人で？ なんか殺されに行くようなものじゃない！ きつと出勤初日に私は死ぬんだわ……。

「そこでなら、メカニッカーとして動けると思うよ。とりあえず行くだけ行ってみない？」

う……。

「ええーいつ！ わかりました！ 行つてきますよっ」
「なんだか半分自棄状態で、私は腕を振った。社長がクスクスと笑
い出す。」

もうこつなつたら、とことん私の道を通つ走つてやるわ！

第二章『MY Name』(5)

「ここね……」

息を呑んで、私はメモを握り締めて寂れたビルを見上げる。二階の三階が、『ロスキーパー中野区支部』の事務所。意を決して階段を昇っていく。

あのヤな男はもう来てるのかな……？

部長って、どんなに怖い人なんだろう？

すっごいムサイおっさんだったらどうしよう……。

いや、いきなり襲いかかってくるとか……。

そうよ、殺人鬼よ、あの《斬魔》よ！？ 狂ったヤツに決まってる……。

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう……！

……そんなこんなと考える内に、私の目の前に古い扉。ドアノブを握り、ゆっくりと中を窺うように入る……。

「……おはようございまーす……」

そーっと足を踏み入れる……二つ並んだ机と、それより大きめの机が一個。それと、接待用らしきソファ。あの淡緑色した髪の毛の男は、既に机に座って腕を組んで黙っている。そして、もう一人。

「あア、おはよう」

「『真』でエエよ。今ところは依頼を一件本社からぶん取ってきたが……」

あの淡緑髪の男、なんかいつも怒ってる感じ。もしかして、あれが素なの？

「なら早くその話をしろ。無駄話は時間の浪費だ」

「なによあんた、最初くらい会話は必要でしょ！」

「何の為にだ。黙れ女」

「ムカつくーっ！ 私にだって名前があるの！」

「黙れと言つのが聞こえんのか」

真より若そうなのに、男の言葉は年寄りっぽいし、何故か醸し出される威厳。なんだか無性に腹が立つわ！

「まアまア、二人とも落ち着いて……」

「だって真っつ」

「その口は閉まらんのか女」

「だから女じゃないくて！ 私はっ！」

「初日からケンカするなっつ」

たった三人で賑やかになる小さな支部。私達の物語はここから始まっていく。

城二、摩耶、キース……ねえみんな、今私、みんなに胸張ってられるかな？ 頑張るよ、私。誰よりもすごいメカニッカーになるから。みんなの分もね。

「私は希紗。安藤希紗！覚えておきなさいよっ、天才メカニツカ
ーの名前を！！」

第二章『MY Name』終演

NEXT 第三章『鏡』

第三章『鏡』(1)

第三章『鏡』

何も無い闇に、俺はいる。

目の前には、瞳の鋭い男がいる。俺と寸分同じ容姿の男が。

俺は視線を逸らすことなく、じっと目を合わす。

暗闇の鏡に、俺は永遠に捕らわれたまま……。

「……」

押し出された空薬莢が落ちる澄んだ音のみが響く。数分前まで喚声に支配されていた場で、俺は一人呼吸する。……俺以外のモノは、もう息を吸う必要が無い。

「漣斗っ」

呼ばれ、俺は振り返る。つい最近から俺の上司になった男が、俺ごと周囲を見渡していた。

「……遅かったか……」

「貴様が遅かろうと、結果は変わらん」

「ワイはそういう事言ってるんやない……っ」
ではどういう意味だ？

部長、霧辺真は腕を震わせて何かを堪えている。俺はこいつの考えている事がわからない。……まあ、わかりたいわけではないがな。

俺の制服に染み付いた血のり。侵入者どもの死骸。銀と、浴びた紅に光るリボルバー式マグナム。真が見た光景は、こんなところだ。

俺は血の海に寝ている侵入者の一人を担ぎ上げ、外へ歩き出す。

「澪斗っ、何処へ……」

「決まっているだろう、コレを処分する。貴様も手伝え」

「あんた……何とも思わんのか？」

「何をだ？」

「この状況を、や」

真の言葉にいつもの軽さは無い。やつに背を向けている俺を、おそらくじっと見ている。

「……そうだな、後始末が面倒だ。処理の事を考えて殺ればよかった」

「っ……」

真の怒気を一瞬背中越しに感じたが、すぐさまその気配は消えた。何故か、やつは必死に己の感情を堪えている。何をしているんだ、こいつは。

「……もういい。貴様は見回りを続けている。俺がコレを片づけておく」

様子のおかしい部長は放っておき、一人で死骸を捨てに行く。

ふと、血溜まりが紅い鏡に見えた。

……俺が紅く映る。映った男は無表情のようで、真っ直ぐ睨んでくる。俺は映る紅い男に問いかけた。

『決めたろう？ 俺は目的の為には何でもする、と』

『そつだ。俺達の《目的》のためなら……手段を選ばん』

紅い鏡との自問自答に、俺はくだらなさを感じて顔を背ける。裏社会の夜は、ふけていく。

警備二日目。裏オークションの商品を警備する今回の依頼は、やはり裏の人間からの襲撃がある。今日は騒がしいあの女も警備に来るらしい。

「昨日の襲撃の件を踏まえて、警備配置を最初から考え直した。全員で警戒態勢に入る」

全員と言っても、どうせ俺達は三人しかいないだろう。真の言葉を聞きながら、俺は銃弾を六発マグナムにセットする。ストックの分の弾も確認し、腰のホルダーに戻した。

「……あんだ、それ使うの？」

壁に寄りかかった体勢の俺に、メカニッカーで監視担当の女が声をかける。俺は、この騒がしい女が好きではない。

「飾りでこんな物を所持するような趣味はない。警備で必要となれば使う」

「そっ……」

女は、暗い表情で俯く。変なやつだ。

「希紗、あんたはワイと来い。澪斗も何かあつたら無線で呼んでや」
無線機を渡され、無言でベルトに繋ぐ。一々返事をするのが面倒なので、そのまま踵を返して俺は配置された場所へ向かった。

暗い通路を一人歩き、俺は無駄と知りながら考えを巡らせる。

俺が配置されたのはオークション会場の裏の入り口付近。真達は商品が納まっている部屋だ。

……簡単に考えて、あちらの方が襲撃される確率が高い。何故俺がこちらに回された？ 真は何を考えている？ 斬魔なのだから、相当の力量を持っているのだろうが……俺が必要無いほど自信があるという事か？

「……くだらん」

小さく言葉にする。他人が何をどう考えようと、俺には関係無い。俺は、課せられた任務を遂行すればいいだけだ。俺の分だけやれば、他人がどうなるかと知らない。

配置された場所から微動だにせず立っていること三時間ほど。静かに精神を強く集中させるこの時間、不快ではない。

が、やがてそれは破られる。無線機に電波が入った音。

『澪斗！ こっちに侵入者！』

あの女の声だ。俺が返事をしようとした時。

『澪斗はエエっ、あんたはこっちに来るな！』

なんだと？

「どういう事だ」

『これくらいワイ一人でなんとかなるっ。あんたはそっちを離れるな！』

そんな事を言われても、もう近くまで来ているのだが。大きく奇声と破壊音が響いている……本当になんとかなるのか？

明らかに真の態度は俺を警備から遠ざけようとしている。何故だ……？

俺は上司の命令に従わなかった。どうせ、今までだって他人の指示など聞いてこなかった俺だ。俺のやりたいようにやる。失敗などしない。

すぐ部屋付近に着いた。部屋の外と中で攻防が繰り広げられている。俺がいる事を、部屋の中の警備員に気をとられている侵入者どもは気付かない。木刀を構える真に飛びかかる三人の心臓を、一気に後ろから撃ち抜く！

「なあっ!？」

「……がっ」

「なん……」

三人の男は即死し、他の侵入者どもも狼狽える。雑魚か。

「……逃げ、クズが」

「やめる……っ、澪斗!」

残りの三発で一人ずつ射殺するのは容易。真の叫びが聞こえた気もしたが、気にする必要はなからう。

六発全て撃ちきって、マグナムは弾切れになる。前と後ろに挟まれた侵入者だったが、残り五人程度で一斉に俺に襲いかかってくる。空薬莖を押し出す指とストック分の弾を抜き出す指を使い、一瞬で再装填。銃口を向けて。

しかし、飛びかかってきた男達はその後ろから薙ぎ払われて横の壁に叩きつけられる。跳躍した真が木刀を一閃させていた。マグナ

ムの銃口は照準を失う。

「邪魔だ、真」

「あんたは手を出すな……！」

「何故だ」

「っ、それは……」

睨み合うようだった俺達の言葉は、遮られる。薙ぎられただけの男達が、起きあがってきたからだ。真、手を抜いたのか……？

真に腕を引かれ、俺達は部屋に駆け込む。大きめの扉は完全に破壊されており、そこを境に警備員と侵入者は構えて動かない。緊迫した空気が、漂う。

「どこの警備員だっ、お前ら！」

「……答える必要性は無いな」

喚いた者の左胸に弾を貫通させるのは、刹那。機関銃や刃物を手に持った侵入者どもが怯んだ隙に、始末を開始する。

「澪斗、よせっ！」

「い……っ、嫌あああーっ！！」

突然背後から、発狂しそうな甲高い叫びが聞こえた。

第三章『鏡』（2）

銃撃戦の最中に、後ろにいた女が悲鳴を上げる。撃たれたか？
いや、一発も俺の後ろには通していない。なら……？

「やめてっ、嫌っ！ いやあああっっ」

「真！ そのうるさい女をどうにかしろ！」
「希紗っ」

銃声からかばうように、真が女の所まで駆けつける。俺が排除を
実行している間、嗚咽のような泣き声が背後からする。……鬱陶し
い。

噴き出す紅、四肢が床に落ちる鈍い音、充滿していく鉄の臭い。
全て、飽きるほどに慣れた感覚。

最後の一人になり、侵入者は逃げたそうと背を向ける。俺の脚は
自然と追って走り出していた。残った弾は一発、始末する人間は、
一人。

「……終わりだ」

狙いは絶対に外さない。部屋から飛び出して、逃げる男の背中を
撃ち抜いた。無論心臓、その右心室。銃声が轟き、それを終止符に
して場は静寂を取り戻す。

……ふと、足下に倒れている侵入者の中に、まだ生存している者
を見つけた。気絶しているだけだ。真が最初に倒したやつらか。
何故死んでいないんだ？ そもそも、何故やつは木刀を扱う？
確か斬魔は刃物で殺戮をしていたはず……。

「希紗っ、希紗……」

振り返ると、真があの子の身体を支えて膝をついている。無傷なのに、女に意識が無い。一体何なんだ、この女は。

「真、何だそのお」

「澪斗！　なんで勝手な行動をした！」

俺の眼を真っ直ぐ睨み、真はその激情を口にする。純粹な憤怒。

「……俺は裏警備員として侵入者を排除したまでだ。何か文句があるのか」

「どうして……最後のやつは、殺すことなかったやろっ。他のやつらだって……！」

「貴様、何を言っている？」

「……」

昨日の事といい、何故こいつは怒っているんだ？　まさか、真は殺しを……。

「……簡単に人を殺すな、などと言うのではあるまいな？」

「っ、」

真は唇を噛み、俯く。どうやら凶星らしい。俺は呆れつつ、僅かに驚いていた。

「ワイは……ワイには、そんな事言う権利なんてあらへん」

「だろっな。今更貴様が、何故殺人を否定する？」

「……理屈やない。ただ、嫌なんや……人が死ぬんは。その人の積

み上げた過去があつて、未来があるのに、それを一瞬で絶つことな
んか……」

「《斬魔》の台詞ではないな」

俺の言葉に、真は深く俯く。女を支える手が震えていた。俺の関
心は、《斬魔》から女に移る。

「それで、何なんだその女は」

「希紗はな、拳銃が駄目なんや」

「は？」

「拳銃にトラウマがあつて……それ以来、銃声にも震えが止まらん
そうや」

「トラウマだと？ そんなことで裏で仕事が出来ると思っているの
か」

「人にはどうしても駄目なモノがあるやろつ。あんたは少しでも人
を思いやれんのか！」

真の視線は鋭い。自分が責められている時より憤っている姿に、
俺は怪訝な表情をする。こいつは、自分より他人を重んじるらしい。

「……他人を思いやつて、何の利益がある。裏社会では必要無いも
のだ。貴様も内心ではわかつているだろう？」

この社会に足を踏み込んで、俺は最低限必要なモノ以外は捨てた。
無駄なモノは重荷となり、いつか弱点になる。それは周知の事実だ。

「わかつていて、それでも尚ワイは言つとる。守護は個人プレイや
ない」

「違うな。規模にもよるだろうが、俺は一人で護りきれん」

根拠は俺の腕だ。俺は今まで、本社にいた頃から一人で護つてき
た。援護も補助も必要無い。だから、他人を想う必要性もない。

「……コレを処分したら、俺は配置場所に戻る。貴様はその役立た
ずの女をどうにかしてやるんだな」

何の感情もこもっていない声色で、俺はそれだけ言って死骸の処理に入る。真の怒気を今度は全身に感じたが、俺達はもう言葉を交わさなかった。真が怒る理由がわかった今、もう俺が言うべき事は何も無い。

……今日も紅い鏡を見る。紅い男の表情は、昨日と何ら変わら無い。ふと、幼少の頃聞いた声が蘇る。

『澪斗、あのね、命は世界に一つだけなんだって』

高い声、輝いた笑顔。俺が奪った、ガラス細工のような透明な心。紅い鏡は、俺につかの間過去の幻影を見せた。俺は、鏡と相対するこの感覚を昔から知っている。

そうだ、俺は。

第三章『鏡』（3）

あれから、あの女の俺を見る眼は畏怖や嫌悪になった。俺達の支部が設立されてまだ僅かで、あの女の前で俺が仕事をしたのはあれが初めてだったからだ。女は俺の銃を恐れ、俺を避けるようになった。少し大人しくなったので、俺にとっては悪くない。

東京本社地下の、射撃練習場。本社の地下には、戦闘訓練場があり、ここはその一室。中野区支部に依頼の無い今日、俺は腕慣らしに来ている。素早く動局的の小さな点を狙い、銃弾は僅かにそれて貫通する。

「……………」
「まだだ。まだ、力量が足りない。雑魚は始末できても、この腕では……………」

「ね、ねえっ」

他の社員が放つ銃声以外で、俺の耳に届いた高い声があった。見下ろすと、あの同じ支部の女。物凄く怯えながら俺を見上げてくる。射撃訓練用の耳あてをつけたままだ……………こうして見ると、一層幼く見えるな。確か歳は、十五だったか。俺と三っしか違わん。

「……………何をしに来た、女」

「な、何度言ったらわかるのよっ、私の名前は……………きゃあっ」
隣りでした銃声に、女は震えてしゃがみ込む。一体何をやっているんだ、この女は。襟首を摘み上げ、俺は女を連れて部屋を出る。

「……………で、何なんだ」

完全に呆れた顔で、俺は問う。女は目の端に涙を浮かばせながら、強気を必死に保った顔で睨み上げ、こう言った。

「その銃、見せてっ」

「は？」

「ちよつとだけでいいから、見せてよっ」

「嫌だ」

即答。

「なつ……、いいじゃない！ ちよつとぐらい！」

「これは他人には渡さん。大体、貴様銃など持てんだらう」

「うっ」と女は言葉に詰まる。わからない女だ。拳銃をあれほど嫌っていたくせに、何故そんな事を言い出す？

「じゃ、じゃあ型だけでも教えてよっ。それくらいイイでしょっ？」

俺は不満そうな顔で目を細める。それだけで女は怯む。背を向けて射撃室の扉を押し開けようと手をつけて、

「……リボルバー（回転）式拳銃《コルトパイソン・357マグナム》」

気まぐれで、そんな事を言っていた。声が届いたかどうかはわからない。……俺らしくない。

射撃場に戻り、俺は再び弾を装填し、精神を的に集中させる。全ての雑念を振り払ってから。

「お、澪斗、ちょうど良かった」

支部の事務所に戻ってきた俺に、振り返り際真が書類を渡してきた。ざっと紙面に目を通す。……依頼か。

「三日後か」

「せや。ちーとばかし大きい仕事やが、警備は一夜だけ。金塊を一晚だけ預かる銀行の、裏警備やな」

ガチャガチャという何かの金属音に俺の意識は逸らされる。顔を向けると、音の原因は机の上に機械部品を広げているあの女だ。まったく、つくづくうるさい。

「……今度もあの女がいるのか？」

「そんな怖い顔すんなや。希紗は今回は監視室」

別に俺は怖い顔をしていない。ただ尋ねただけだ。女にこちらの会話に気付いた様子は無く、機械いじりに没頭している。

「これよ……赤外線センサーを……配線に異常は無いわ……」

ブツブツと独り言を零す女。そういえばこの女、本業はメカニッカーだったか。だがこんな歳の女が、一流に機械を扱えるわけもない。所詮子供騙し程度だろう。

「澪斗？ どうした？」

「……何でもない。三日後にそこに行けばいいのだな、ならば俺はそれまで本社か家にいる。よほどの事がない限り呼ぶな」

「あんた……、よっぽどココが嫌いなんやなア」

「フン、俺に合わないだけだ」

この事務所に居たところで時間の浪費だ。本社で訓練をしていた方がよほど有効的だろう。大体、この空気を俺は拒絶する。馴れ合いは好かん。

「はいはい。すみませんね」

「真、返事は一度にしる」

「はい」

「伸ばすな」

意地悪く返す部長を睨む。こいつはどついう教育を受けてきたんだ。大人げないやつめ。

カバンを掴み、踵を返して俺は事務所から出ていく。暗い階段を降り、一階の駐車場に停めてある車のキーを解除しながら、ふと考える。

……俺は何故この支部に配属された？

あの社長、配属される人間の性格を知っていながらわざと？ 何故だ、俺に何をさせよう？

車のサイドミラーに俺が映る。

俺は……利用しているつもりで、逆に利用されているというのか

……っ？

第三章『鏡』（4）

「では、どうかお願いします」

銀行職員に深く頭を下げられ、俺達三人だけが監視室に残る。

「みんな、聞いてくれ。あの金庫室は壁が合金で、扉さえ死守すればエエわけや。そこでワイと漣斗は扉前で待機、希紗は監視カメラから観ていてや」

俺達が雇われたという事は、まず間違いない侵入者がある。だが、今回の侵入者はおそらく表の人間だろう。

「れ、漣斗」

「何だ女。気安く呼ぶな」

僅かに怯みながら、女は俺を見上げる。この女、騒がしい上に馴れ馴れしい。俺は力を認めた者しか名を呼ぶことを許さん。

「こ、これ、使ってっ」

「は？」

女が意を決して俺に突き出したのは、一丁の黒い銃。俺のマグナムとサイズは大して差は無いが、これは……カートリッジ式？

「ぜ、絶対役に立つから、だから……」

「断る」

俺は躊躇もしなかった。当然だ。俺には、マグナムがある。

「う、どうして……」

「生憎、俺は二丁同時に扱えるほど器用ではないのでな。それに、役立たずの貴様が『役に立つ』モノを作れるとは思わん」

女はひどく傷ついた表情で、ふっと視線を逸らした。退いたということは、少しは自覚があるのだろう。

「行くぞ真」

「……あア」

険しい表情の真を連れ、俺は金庫へ向かう。もう思考には女は片鱗も無かったのだが。

「澪斗」

「何だ」

「……希紗は役立たずなんかやない。希紗、アレを三日徹夜で作ったで」

あの銃のことか？ 三日前からアレを？

……今は関係無いだろう。

「そんな事より、気を引き締める。ミスは許さん」

「それ、部長のワイの台詞やと思うんやけど？」

貴様が言わないから先に言ったまでだ。真は苦笑で頭を抱えていた。こいつ、本当にあの《斬魔》なのか？

俺が聞いた限りでは、《斬魔》は百数人を殺害した凶悪犯だという。しかも六年前の話だ、俺達はまだ年端もいかない子供だったはず。あの社長、俺に嘘を……？

「斬魔は何故こんな所で生きているのだろうな」

横顔を見なくても、やつが何か突き刺さった表情をするのかわかる。真は息を吞んで黙り込む。俺は本来詮索を好まないが、容易に他人の言う事を信じるほどお人好しではないのでな。

「……償うため、かなア」

「何？」

「罪を償う手段で死を選ぶのは簡単や。たった一人が死ぬぐらいで

償える罪やない……そういう事や」

「この世に未練があるのではないか？」

綺麗事を言われるのが嫌いな俺は、ガラにも無く詮索を続ける。

普段は他人の事など全く興味を持たないのに。俺の嘲りを含んだ言葉に、真は苦笑した。

「せやなア、未練が持てる世界だつたら良かったのにな」

……その苦笑は軽かったのに。何故だ、何故鳥肌が立つ？俺が今感じているこの悪寒は？この男……！

「どした溲斗？変な話してごめんな？」

「い、いや、すまなかつた」

何故俺は謝っている？

震撼を隠し、平静を装う。俺は何故動揺しているんだ？

「さて、着いたな」

真の声で我に返り、顔を上げる。ありきたりな巨大な円形の金庫扉が、そびえ立っていた。

「……」

深夜の沈黙を守り警備すること四時間余り経つただろうか。途中で真が「しりとりでもする？」と馬鹿げた事を言い出したので睨んでやった。この男、本当にわからん。

が、突如入る無線。やっとか。

『真！　なんか外に怪しい一団がいるのよ！　どうしよつ、あれヤバくない？』

「わかった、そのままそいつら監視しとけ。こっちでなんとかするから」

『う、うんっ』

回線の切れる音。ここまで来るのにたった一本しかない通路を睨む。

「なア滲斗、あんたは少しぐらい動揺しないん？」

あの女が緊張した声だったからか、俺にそんな事を訊いてくる。

「一々警備員が動揺してどうする」

「そりゃそうやけど。随分慣れるのが早いな、と思つて。やっぱ、前の職業のおかげ？　そもそも、なんでまた警備員に？」

俺のあずかり知らぬところで勝手に東京裏社会に流れていた、誰が付けたか《消去執行人》という名。本社でも、誰もが知っていた。暗殺業もまた、守護業の天敵だからだ。

「……それは部長命令か」

上司として、俺に教えると？

「ちやうちやう。エエよ、言いたくなければなら訊くな。」

どうせ、真実は話さないが。俺の過去は、目的は……明かせない。

「どうした？」

不審げに腕時計を見る俺に、真が振り返る。経験の差か、真には余裕が窺える。

「女の報告から、もう随分と経つ。ここに辿り着くまでの道は複雑

ではないはずだ」

「セキュリティーのこと気にしてんのかなア、やっぱ表の人間やるうし」

「……！ 真、貴様はここを離れるな！」

「えっ？ あ、ちよつと漣斗！」

混乱している上司を残し、俺は走り出す。もと来た一本道を疾走しながら、舌打ちをしていた。

愚かだった……！

ここは大手銀行、誰が考えても複雑なセキュリティーが働いていると思われる。そして警察を恐れる表の人間は、セキュリティーを解除する方法を探す。普通、セキュリティーが解除でき、警備配置まで把握できる場所は。

監視室……！

「あの女……っ」

俺の脳裏にあの女の最後の顔が過ぎる。それだけで、脚が速まっ
ていく。

失敗は許さない。

第三章『鏡』（5）

『……み、みんなっ……きゃあっ！』

ノイズ音に変わり、通信は遮断される。

『おいてめえ！ セキュリティーの解除装置はどれだ！』

無線はまだ生きていた。ノイズに紛れて、そんな男の声が聞こえる。やはり侵入者は監視室にいる。

『教えるわけないでしょっ！』

『この女あ……！ そんなに早死してえのか！』

監視室まであと僅かだ。だがあの女、このままだと金庫室のロックまで解除してしまうかもしれない。使えないヤツめ……！

『こ、殺したいなら早くやりなさいよ！ 私は、私に恥じなく生きるのっ……！』

……………。

「……上出来だ、女」

豪快に破壊された扉に手をかけ、女の首をしめていた侵入者の腕を撃ち抜く。撃たれた男は呻き声を上げ、他の男どもが驚愕の視線をこちらに向ける。

「手間をかけさせたようだな。感謝しろ、《セキュリティー》が出向いてきて《やったぞ》」

「澪斗……っ」

「なんだと!? どういうことだっ」

止められていた呼吸に息を荒くしながら、女が座り込んでこちらに振り返る。侵入者はざっと十人程度か。口止めされていたが、ここまで来られた以上セキリティーの内容を話しても問題有るまい。全員、生きては返さないのだからな。

「無駄話は好まんが、教えてやろう。ここのセキリティー……」
《防犯システム》は俺達警備員のことだ」

「んだとっ!?」

「つまりは俺を殺せばセキリティー解除だ。その女を揺すつたところでもうにもならんぞ」

鼻で軽く嘲笑する。男どもは驚いたのか困惑の表情を見せる。

俺は嘘をついていない。本当に、この銀行には今、防犯システムが働いていない。俺達以外は。せいぜい最低限の金庫室のロックぐらいだ。返ってこちらの仕事の邪魔になるので先に解除してある。下手に警報でも鳴らされれば警察が来て厄介だからな。

「ふ、ふざけやがって……! まあいい! てめえ一人を殺せば金塊が手に入るんだからなあ!」

「……殺せれば、な」

粹がつて銃口を上げた一人の左胸を、刹那に撃ち抜く。……一人目。

続いて銃身が重い機関銃の照準を合わせていた右二人の脳天を連続射撃。遅い。……二、三人目。

「っ、のヤローっ!」

三日月状の大きい青龍刀を振り上げ、熱くなって襲い来る。愚か

な。

刃を振るうが、隙が有りすぎだ。寸前でかわし、マグナムを左胸に押しつける。男を見もせず、無表情のまま指に力を込める。

「……さらばだ」

「がつ、ああ……！」

至近距離からの発砲により即死。ゆっくりと倒れゆく身体と擦れちがう。……四人目。

「な、なんなんだこいつ！」

「まとめてかかれ！ 連続しては撃てねえっ！」

……一応訂正しておく、連続発砲可能なのだが。ただ、リボルバー式の銃は再装填するまでの銃弾が少ない。連射式と比べ、俺の銃は一度に六発しか連続発砲が出来ないだけだ。銃弾を装填する瞬間に隙が生じるのがデメリットか。

四人一気に飛びかかってくる。腕の届く範囲に入られるまでに一人を射殺、太い腕を伸ばしてきた男の眉間を銃身で殴り飛ばす。自棄状態で腰に掴みかかってきた男の鳩尾を蹴ると、腰に下げているストック用の銃弾がばらけて落ちていった。四人目がそれに脚をとられて滑ったので、その隙に監視室の奥に転がり込む。

「ちっ……」

出来ないわけではないが、俺は肉弾戦が好きではない。あんな原始的で野蛮な手段で戦おうとする者の気が知れん。

一度監視室内の大机に身を隠し、両者距離をとって様子を窺う。

……どうするか……。

先程の一発で、六発全てを撃ち終わってしまった。ストックの銃

弾は男どもの倒れている床の上だ。悪状況に再び舌打ちをしたくなるが、こちらが今不利だということを敵に悟らせるわけにはいかない。

「ねえ……ねえっ、澪斗っ」

潜められた声に不機嫌な顔で振り向くと、同じ机の影にあの女が隠れていた。そういえばこの女、いつの間にか視界から消えていた。ここに隠れていたのか……。

「どしたの？　なんで隠れてるの？」

この女……つくづくわからなくなる。こちらが訊きたい。何故貴様はココに……裏社会にいるんだっ？

「……弾のストックを失った。もう銃は使えん」

俺にも自棄が回ったのか、女に状況説明してやる。女はふと頭を捻って考える仕草をする。

……？

「おい、その出血はどうした」

女の横顔から見えた、顔を紅く染める流血。俺はこんな状況にも関わらず、何故かそんな事を尋ねていた。

「へ？　これ？　ああ、最初に背後から殴られちゃって……あはは、私ト口いから」

「……」

痛みを堪えているのがわかる無理な笑み。同僚の殺傷状況などいつも眼中に無かった俺が、初めて気にかけた。自分自身、その理由がわからん。

「どうしたガキい！早く出てこいっ」

机が銃弾に耐えている。だが、長くはもたない……！

状況打破の方法を探っていた俺の思考を止めたのは、意外な声だった。

「あの……さ、もしよければコレ使ってみない？」

俺の顔色を窺うように女が差し出したのは、あの黒い銃。三日徹夜で作ったとかいう、胡散臭いカートリッジ式の……。

「そ、そんな極度に嫌そうな顔しなくても……」

……俺はそんな顔をしているか？

無意識に俺の眉間は深いシワを刻んだらしい。

おどおどする女の手から、黒い銃を取る。もうこの際だ、玩具に賭ける。賭事は、俺の性に合わんが。

「……貴様はそこから動くな」

銃を握り、机の端から侵入者達を確認する。こけおどしでいい、一発放ったら飛び出して、ストツクの銃弾を回収する！

「そこかっ！」

黒い銃口を上げて、同時に構える！ 引き金を全力で引いて……俺は驚いた。

速いつ！？

「があっ」

俺が放った弾丸はマグナムより速かった。しかも貫通こそしないものの、撃たれた男は激痛が走った顔で倒れる。

「や、やれ！」

驚きで最初の計画を忘れ、俺は反射的にそのまま黒い銃を構えていた。あと男は四人。確実な急所を一瞬で定め、一番近かった二人

組みを撃つ。

やはり銀色の弾は身体を貫通しないし、あまり銃声もしない。だが倒れていく男ども。

この感覚は……。

この重量、銃身のサイズ、引き金の重さまで、俺のマグナムと酷似している。わざと意図して作ったというのか？ 俺のマグナムと同じ型で……？

しかし威力が足りないのか、一度撃った男が一人起きあがってくる。

「漣斗っ、オマケにこれ！」

「なっ」

女から投げ渡されたのは、軽く薄い縁のない眼鏡。俺は視力は悪くないのだが。コレを、どうしろと？

眼鏡に注意を取られている隙に銃弾に襲われ、なんとか跳んで避ける。ここまでできてしまったらしょうがない……俺は賭けた。この銃に、あの女の腕に。

眼鏡をかけると、視界に文字が浮かぶ。飛んでくる弾丸の軌道が表示され、容易に避ける事が出来る。銃口を上げればその照準が青い輪として浮かぶ。

「いい加減死ねええ！」

男がドコを狙ってくるかが表示されてわかる。それを避けるのは簡単で、同時に青い輪が眉間を狙う！

射撃位置は完璧だった。眉間に弾を当てられた男が卒倒する。今度は起きあがる気配を見せない。

残ったのは二人。一人が怖じ気づいて後ずさる。

「く、くそ……」

「一つ訊く。貴様らは裏の人間か」

「だっ、だったらどうした！」

「………右手に狼の入れ墨をした殺し屋を知っているか」

「知らねえよそんなヤツ！」

「……そうか」

答えが聞けたので用済みの一人を撃って昏倒させる。……あと一人。

一度近くの棚に隠れ、最後の隙を窺う。もうこの銃の扱いは覚えただ。次で決める……！

最後の一人が震えて銃を構えている。俺が身を乗り出そうとした時、軽い何かが倒れた音が。瞬間、侵入者の男と共に注意がそちらに向く。男はその音を俺だと思い込み、瞬時に銃を構えていた。音の元凶は……倒れて机の影からはみ出したあの女。怪我のせいでもう意識が……！

「ちっ」

怯えて引き金を引こうとしている男が見えて、俺は女の方へ飛び出していく。……俺の意思とは関係無く。

転がり込んで女を抱き、一発は避けた。だが、銃を構えて両者動けなくなる。俺は片膝をついて片腕に気絶した女を抱いたまま、銃口を真っ直ぐ急所の位置に向けている。だが、男の銃口も俺の喉元に向けた状態だ。

……どうする。

俺は冷静だった。この体勢では、素早く動けない。動いたとして、激しく揺らせば女の容態が悪化する。頭部からの出血が続けば、脳に障害が残る恐れがある。

……？

何故俺はこの女にそんなに構っている？ 答えが出てこない……こんな状況だというのに、俺自身に虫唾が走る。《俺》が、わからない。

俺の理性が、負けている……？ 一体何に！？ この俺が……！

……俺は強引に答えを引きずり出した。『この女にはまだ、利用価値がある』……そういう事だ。

だから、ついでに護ってやる。

「こ、こ……こうなったらてめえは道連れだああー！
完全に自我を失いつつある男が、引き金を引こうとする。

相打ちなど好まんが、俺は……！！

第三章『鏡』(6)

鮮血が舞う。

拳銃が落ち……驚愕に目を見開いたまま、男はうつ伏せに倒れてきた。俺はその男の後ろに立っていた影に驚く。

「ウチの仲間に手エ出さんといってもらえるか？ 傷つけることは許さん」

「……真、貴様……」

初めて見る真の冷たい眼。その手に握られているのは、漆黒に煌めく日本刀。禍々しい気を放っているかのようなその刃は、使用者の怒気を増幅させているように感じる。俺は気付く。間違いなくこの男が《斬魔》なのだ。

背後から斬りつけられた男は背から出血して気を失っていた。深くは斬れていない……殺す気は無かったのか。

「……貴様、残っていると云っただろう。即戻れ」

「うわっ、助けに来たのにその態度！？ なんで監視室が狙われとるって言うってくれなかったん!？」

「助けると呼んだ覚えは無い。……俺一人で充分だと思ったからこっつしたまでだ」

「またそんな勝手な判断を！つ！ あんたワイの言う事聞く気あるん！？」

「無い」

「だああアアア！ そう言うと思ったああアアアつ
なら訊くなというのに。」

腹が立つたように地団駄を踏んで頭を抱える真のドコにも、先程垣間見えた《斬魔》の面影は無い。すぐ収められた刀の鞘は、よく見ればあの木刀ではないか。包帯で巻かれたあの変な木刀が刀の鞘だった？ これが《斬魔》のカラクリか。

「真、そんな事よりこの辺りに医者はあるか？」

「へ？ 医者？ えっと……少し遠いが炎在先生のトコがあるけど

……」

「この女が負傷している。そこへ手配しろ」

「なっ、そういう事は早く言わんかいっ」

焦って真が監視室が出ていく。女を抱いた体勢のまま怪我の具合を見ていた。

ふとよぎる、あの笑顔。俺が護ることの出来なかった、あの、笑顔……。

「春菜……」

「……漣斗……？」

「っ、気がついたのか？」

今の眩きが聞こえていないかと危ぶみながら、それにはあえて触れずに尋ねた。

女は近い俺の顔をまじまじと見て、顔を赤くする。どうした？

「う、うわ、わ、わ、ちよ、ちよ、ちよっと降ろしてよっ」

「下手に動くな、怪我が悪化する」

希望通り床に降ろして寝かせてやるが、女はまだ赤くなってジタバタしている。何をしているんだ、この女。

「あっ、ど、どうだったノアは？」

「『ノア』……？」

ふと目線を下げ、右手に握っていた黒い銃を観察する。確かに握り手の下の方に、『NOAH』と彫ってあった。コレの名前か？

「……訊くが、貴様コレを一人で作ったのか？」

「え？ そうだけど？ け、結構イイ出来だと思っただけどー……どう？」

「これほど高度なモノを、こんな歳で……？」

「ね、ねえ、どうだった？ どう？ どう？」

「………うるさいぞ。傷口が開くからそれ以上喋るな」

軽い身体を横たわらせたまま、俺は立ち上がって顔を背ける。ただ、勝手にこんな事を口走っていた。

「性能は悪くなかった。ご苦労だった、希紗」

「………ありがと、漣斗」

何故か、もう名を言われても不機嫌にならない。

「勘違いするなよ、俺はただ」

振り返ると、希紗はもう静かな寝息を立てていた。三日寝てない

というし、もう限界か。調子に乗らないように言っただけだ。つたが、それは次の機会にする。

希紗の寝顔は、幸せそうだった。少しだけ、その微笑が似ている。

……春菜……。

荒らされた監視室に、俺は一人立つ。足下に倒れる人間達。ふと、銃弾にヒビを入れられた鏡に気付いた。俺が切れて映る。

『命は世界に一つだけ……その意味がわかる？ いろんな命がいっぱい世界にはあるけど、一つとして全く同じ命なんて無いの。自分の命も、大切な人の命も一つだけ。……そして、誰かにとって大切な人の命もたった一つ。だから聞いて、命はとっても尊いの』

初めて命について説かれた時。あの時俺は、なんと返事しただろう。もう思い出せないほど、遠い過去の記憶。

たとえこの道が間違っていたとしても。たとえこの先に闇しかないとしても。たとえ……破滅が待ち構えているとしても。

俺は進む。後戻りする道など己で絶った。貴女は決して許してくれないだろうが。

鏡からも顔を背ける。その表情は嘲笑だった。俺は滅多に自嘲などしないのに。

真を待っている間、俺は足下に転がっていたノアの弾に気付く。それを拾い上げて、俺はコレの殺傷能力が低かった理由を知る。

「……フン」

口元が自然と引き上がる。希紗め、ふざけおって……。指でパチンコ玉を弾き落とし、小さな金属音が静寂に僅かに響く。右手に握っているノアが軽い。

『ノア』、か。

《希望》の名を持つ銃は、《絶望》への道を辿る俺にどのような未来を指し示すのだろうか……。

第三章 『鏡』 終演

NEXT 第四章 『風車』

第四章『風車』(1)

第四章『風車』

冷たいとか。

痛いとか。

怖いとか。

寂しいとか。

悲しいとか。

……そんなこと、感じなかったんだ。

ただ真っ白で。それだけ。

意識が戻ると同時に、開く瞳。この感覚には慣れたけど、広がっていた光景は見慣れないモノだった。

古そうな、茶色い天井。曇り空でも、あの冷たい白壁でもない。寝かされた身体は、柔らかい何かの上に。

「目え覚めたみたいだな？」
「……………」

突然だけど、聞いたことのある声。ゆっくりと顔を左に向けると、紺髪をした男の人が僕の近くの床に座り込んだ。

「……………」

「だから、なんで俺の名前を途中で切るんだよ？」

あぐらをかいて髪を掻き上げるこの人は、この前僕を助けてくれた人。名前は確か、『蒼波遼平』。

あれ……………」

「僕は……………」

目の前の人の名前がわかるのに。僕の名前がわからない。そもそも、なんでココにいるんだっけ？

「……………」

僕の呟きに、声を低くする男の人……………」
「遼。どういう意味だろう、『後遺症』って？」

「遼、僕は誰？ なんでココにいるの??」

「お前は……………」
「お前の名前は、『純也』だ。思い出せるか、昨日まで獅子彦の病院にいたのを？」

えっと……………」
「あ、獅子彦先生はわかる。僕の治療をしてくれて……………」
「そうだ、僕は入院してたんだ。あれ？ でも、なんで僕は入院してたの??」

……………」
「どうして……………」

「あのさ、なんだかよく思い出せないんだ。僕、どうしたの??」

……………」

僕と視線を逸らして、遼の顔が髪に隠れる。なんで？ なんて言

つてくれないの？

「今は……気にするな。悪い純也、でもまだ……まだ、今は……」
震えて弱まっついていく声……遼……？ 僕のせい？ 遼が震えているのは、僕のせい？

「ごめん、やっぱり訊かない。もう、行くよ」

寝かされていたのはソファだったみたい。窓はカーテンで閉められているけど、明るい光が漏れているのを見ると今は昼なのだろう。掛けられていた毛布をたたんで、僕は立ち上がった。

「行くつて、ドコにだよ！？」

何故か焦ったような遼の言葉に、僕も気付く。そうだ、ドコに行くというのだろう。何も思い出せないのに。ココが何処かもわからないのに。

「……遼、ココ、何処？」

「ココは、俺の家……アパートだ。杉並区にある。症状が落ち着いたから、お前は退院したんだ」

『症状』つて……僕、何かの病気？ そっいえば、ずっとベッドに寝たきりだったっけ。そこで、確か……。

「あ……《約束》……」

「そうだ、《約束》したろ？ だから、俺ンちに運んできた。とりあえずお前はココに居候だ」

「いいの……？ だって僕、《化け物》で……！」

『約束』という単語を思い出した途端、色んなコトが記憶に蘇ってきた。惨劇、狂気、化け物、願い、そして《約束》……。

立ち上がった遼を見上げる僕の頭に手を置いて、その漆黒の瞳を細めて。哀しそうで、自虐的で、それでもふざけたような色。

「お前みてえのが『化け物』なら、怖くねーよ。そうだな、お前にはココで」

僕が化け物であろうとなかろうと、遼にはどうでもいいことなんだ。そう、だよな……僕の存在は、もうじき消えるから……。

「　　っつーわけで、お前は家事をしる。わかったか？」

「ふえ？　あ、ごめん、カジって何？」

「やっぱ知らねえか……。じゃ、俺が後で教える。今はまだ休んでる」

軽く押されるだけで、小さい僕の身体はソファに戻る。たたんだ毛布を投げられたのは、「寝てろ」という指示なのだろう。

それから何も言わず、部屋から出て行く遼。毛布を抱いてソファに座る僕が、一人つきり。

「ごめん……ごめんなさい……」

僕のせいだ。僕が勝手にあんな《約束》したから。だから遼は、嫌なのに僕を置かせてくれているんだ。化け物の、僕を……。

僕の雫は、毛布を濡らした。化け物は頭まで毛布を被り、静かに嗚咽を漏らしていた。

第四章『風車』(2)

「終わったあ〜」

遼の部屋に居候を始めて一週間。僕はリビングのソファに腰を下ろす。食器も洗ったし、部屋の掃除もした。慣れない洗濯もやったし、ちゃんと遼の制服にはアイロンをかけた。遼の仕事は、『ケービーン』って言うらしい。青い制服がカッコイイ。

「…………ヒマだな…………」

遼に、外出しないよう言われている。この部屋の外には、危険な世界が広がっていると教えられた。でも、違うんだ。僕がココに居なくてはならない理由は…………一番危険なのは、『僕自身』なのだから。

遼には仕事がある。だから今、居ない。遼曰く、「すっげえ面倒な仕事」らしい。僕は昼の間、ずっと待っているだけ。独りで、ずっと。

大きな窓は、さっきから強い北風に打たれている。ここ一週間、空は薄暗い雲が支配していた。白い空は、無性に僕を不安にさせる。

「帰ったぜ〜」

ドアノブを捻る金属音がした。僕は我に返って、玄関に向かう。厚いコートを羽織った遼が、荒っぽくカバンを投げ渡してくる。

「今日は早いんだね」

「まあな。けど明日は依頼があるから帰れねえ」

「そっか…………」

寂しいけど、ここで嫌な顔しちゃいけないんだ。頑張って笑顔を作ってみる。……僕って、演技が下手だ。

「……慣れねえな……」

ふと、遼が呟いた。僕が顔を上げると、一瞬だけ目が合っただけで逸らされる。僕の口ト？

「どうしたの？」

「別に、大した事じゃねえ。ただ……家に誰か居るって感覚に慣れねえんだよ」

「……」

やっぱりいきなり同居を始めたら、慣れないんだろうな。僕だっていつもどこか落ちて着かないし。でも遼の場合、突然自分の生活が変わったんだよね。嫌……なんだろうな。

「飯は？」

「あ、今用意するね！ ちょっと待ってて」

隙あらば何かを考えようとする頭を振り切って、僕は台所へ走っていく。ダメだ、考えれば考えるほど、僕の思考は嫌な結論に辿り着こうとする。

わかってるよ……わかってる……僕の存在は邪魔なのだと……。

「……おい、お前昼間は何してた？」

台所で手を動かす僕に、リビングのソファに腰掛ける遼が訊いてくる。僕は手を休めずに答えた。

「遼に言われた家事をしたよ。他は何もしてないけど」

「……退屈だったろ」

「そ、そんなことないよつ。僕は大丈夫」

訝しげにこちらを見る遼に、笑顔を返す。これ以上僕がワガママを言うわけにはいかない。

遼は無言で立ち上がり、自分の部屋に入って行ってしまっただけ。そしてしばらくしてから、数枚の紙を持って帰ってきた。

「ちよつと来い」

「え？」

言われるまま、鍋の火を消してソファ前の机まで行く。小さな卓上に、遼が青い紙を一枚置いた。

「よく見てろ」

遼の細い指が、不器用ながら紙を折っていく。最初に三角に折って……開いて……折り目をつけたらまた折って。何を始めたのだから？

やがて、青い紙は四つの頂点がある星のような形になった。ここに、持ってきた曲がるストローを刺す。……これで完成らしい。

「これ、何？」

「『風車』って言ってな、風が吹くと回るやつだ」

「カザグルマ……？」

「持ってみろ」と言われて僕はストローの部分握る。だがここは室内だ。風が吹くわけではない。

「……どうするの？」

「お前なあ……。回らなきゃ、てめえで回せばいいだろうが」

「あ、そっか」

僕が《化け物》である理由にして、《僕自身》の過去への手がかり。風を操れるという、特殊能力。

少しだけ、神経を研ぎ澄ます。流れる風をイメージして、穏やかに……。

段々と、青い星は回り始める。綺麗だ……なんてことのないただの紙なのに、青い星は円に変わり、心が安らぐ。ずっと見ていたい。どうか、止まらないで。

「……ありがとう」

「あ？」

「僕、コレ大事にするね」

嬉しくて、僕は大切にその風車をしまった。遼は呆気にとられた顔をする。

……幸せを感じたんだ。些細な事なんだけど、僕にとっては何物にも代え難いコトで。明るい感情なんて、記憶に無かったから。記憶が無いんだから当然かもしれないけど……それでも、この気持ち、大事にしたい。

「俺が折れるモンなんてそんなものくらいだからよ、後は自分で遊んでろや」

「うん！」

満面の笑みで僕は頷いた。明日が楽しみだと、その時初めて思った。

第四章『風車』(3)

もう陽はとつくに暮れてしまったと思うけど、やっぱり今日も曇りなので確認はできない。時刻は八時過ぎ……冷たい蛍光灯が照らす部屋に、僕は一人。

ソファの前の小さい机で、黙々と紙を折る。机の上には昨日遼が作ってくれた風車と、僕が今日ずっと作り続けてきた大小様々な色の風車。作っけていてもそうだけど、見ても全然飽きない。でも不思議と……何故か、どんなに頑張っても遼の風車より飽きないモノが作れない。遼のだけは、特別だった。

「……………」

不穏な気を感じ、せつせと折っていた手を止める。嫌な感じだ……この気配、確か……？

気圧の変化だ。ぞつとして、手から紙が落ちる。これは、アレの予兆……！

「……………」

よろよろと立ち上がり、震える手でカーテンを引く。輝く街のネオンと闇……その他に、僕の瞳に映るモノがあった。窓に押しつけた指も、冷たさを感じない。アレが……っ！

助けを求めるように、抵抗するように、窓を開けてみた。冬の冷気が部屋に押し入ってくる……でも、そんなモノも関係無い。

白だ。白が、僕の身体に触れる。

「あ……あ、ああ……！！！」

膝から力が抜け、僕は崩れるように倒れていく。なんとか両腕で

身体を支えるけど、その腕も震えが止まらない！

冷たいとか。

痛いとか。

怖いとか。

寂しいとか。

悲しいとか。

……そんなこと、感じなかったんだ。遠と会ったまでは。

でも。

でも今は違う。

冷たいっ！

痛いっ！

怖いっ！

寂しいっ！

悲しいっ！

……たすけて、誰かつ！

「ああああああ……うああっ」

伸ばした腕はもう窓に届かない。頭が痛い……ノイズが走る。身体が痙攣し始めて……発作が僕を襲う。動け、な、い……っ！

『く、来るなあっ』

『化け物がああ！』

『やめろ……殺さないでくれっ！』

違う。

違うっ。

違うんだ！ 待って！ 僕は……僕はー！！

「た、すけて……っ！ りょう……っっ」

余力の叫びは吹きすさぶ風と雪に散られて……僕は白い闇に引き込まれた。

白だ。

僕が目を閉じているのか、それとも光景が白一面なのか。

「走れ、早く！」

え？ 誰？

僕は何故か走っている。僕の右腕を引いている、誰かが前にいる。顔がよく見えない……あなたは誰？ どうして僕は走ってるの？

足が重たい。そうか、ここは雪が積もってるんだ。雪に僕達は足を取られているんだ。

「いたぞ、追えー！」

「もう来たか……っ」

僕の腕を引く人は、後ろを振り返って速度を上げる。背後から複数の足音が聞こえる……これはどういう事なの？ 僕はどうしたの？ しばらく走り続けてたけど、いきなり前の人は止まる。どうしたのかと思っただけを覗くと、切れた白の世界。崖……？ その先にもまた白が広がっているけれど。

追ってきた人達が、距離を置いて止まった。僕の腕を引いていた人は、その背中に僕をかばう。

「やれ！」

追ってきた人の中心の人間が、腕を上げた。

次の瞬間は、視界が消える。壊れた映像ディスクのように、砂嵐とノイズ音。

純白に、真紅が舞う。最後にそれだけが確認できた。

「生きる……っ、純也あああああー！！！！！！」

待ってっ！ あなたは誰！？ 僕は……！！

……画面は暗転する。再び僕の目に光が戻った時、そこは雪積もる寂れた街外れだった。灰色のビル街を、ぼうつと見上げる。

次に、首を下げて自分の身体を見下ろす。紅い。両手から胴体まで、真っ赤に染まっていた。

何……コレ……？

最後に、目線を正面に向ける。血塗れで倒れている男の人達がたくさんいた。……いや、その中に一人、まだ立ってる人が……。

「冗談じゃねえぞ……チビ……！」

その人は、出血している右腕を強く押さえてこちらを睨んでいる。漆黒の瞳は、ただ僕だけを見つめていた。

どうしたの？ どうして怪我してるの？ ダメだよっ、そんな傷で動いちゃ……！

拳を振り上げ、絶叫に近い声で、その人は僕に殴りかかってくる！ 僕の視界が動く　え、なんで！？

僕も向かっていつてる！？ やめて！ 僕の腕が……その人を狙って……！！

やめてよおおおーっ！

……また純白と真紅。

また……またなんだ……。大嫌いだ……。もうやめて。お願い、僕をたすけて……。

第四章『風車』(4)

「……ビ、チビ！ おい純也！」

温かい……なんだろう、誰かが僕を呼んでる……。

両肩を強く掴まれて、僕は揺り動かされていた。もう視界は白じやない。ぼんやりとした画面に映っているのは、最近見慣れた顔。

「……りよ、う？」

「何やってんだお前！ 死にたいのかつ？」

「へ……？」

身体を起こしたいのに、指の一本も動かなかった。だから確認できるのは、怒っている遼の顔だけ。僕は、なんで怒られてるんだろう？

「……おかえり、遼……」

とりあえず言ってみる。仕事は終わったのかな？

「おかえり、じゃねえよバカ。何考えてんだ？」

遼の手がとつても熱い……違うな、僕の体温が無いんだ。リビングには朝陽が射し込んでいて……窓辺には大量の雪が積もっている。

あ、そうか。

僕は昨日、あのまま倒れたんだ。それで、ずっと窓が開けっ放しだったんだ。だから遼が怒ってるんだ……。

「ごめんなさい、すぐ部屋片づけるから……」

とか言ってみたものの、身体が凍り付いたように動かない。どうしよう、きつと遼は許してくれないだろうな。だってこんなに雪が部屋の中に入ってるもの。

「……寝てる」

「え？」

「俺が後でなんとかする。どうせお前、動けねえだろ」

それはそうだけど。でも、遼の顔は不機嫌そう。僕は気力でなんとか上半身を起きあがらせる。指の感覚は無いけど……何か焼けるように熱いモノが、僕の頬を伝った。

「……ごめんなさい」

「黙れ」

「ごめんなさい」

「黙れってんだよ」

「ごめんなさい」

「お前、いい加減に……っ」

遼は怒鳴るかたちで振り向く。僕と目が合うと、言葉を続けなかった。ぽろぽろと落ちる雫で、僕には遼がよく見えない。

僕がいなくなればいいのに、それが出来ない。僕は遼と離れるわけにはいかないんだ。……でもそれは、あくまで僕個人の問題。遼には何の責任も無い。

「ぼく……僕、何も出来なくて……謝ることしか出来なくて……だからっ」

「……小せえくせに、無理してんじゃねえよ。今何を思ってる？」

「……し……」

「聞こえねえ」

顔が上げられない僕の前で、きつと遼は僕を見下ろしてる。絶対に我慢していようって思ってたのに、僕の口は心の声を漏らしてしまっ。

「寂しかったつ、僕独りで……」
「……そうか」

僕の頭に、軽く手が置かれる。優しい大きな手……なんだか懐かしい。僕はこの感覚を知っている。

「前言撤回だな。お前は人間だ」

「え……？」

「自分の感情で泣けるのは、ヒトだけだ。お前は確かに、化け物じやねえ。化け物に涙は無い」

僕は気付いた。僕に明るい感情をくれるのは、過去でも風車でもない。ただ傍に、遼が居ること。それだけで僕は、幸せを感じられる。偽物かもしれないけれど。

「純也、明日俺と職場に来い」

「ふえ？」

「ずっと家の中に居るもの良くねえからな。変なヤツらばっかだが、ココに居るよかましたろ」

「でも、僕……」

「あそこじゃマトモな人間なんていねーよ。かろつじてぎりぎりヒトの境界線にいるヤツばっかだ」

「そうなの？」

涙がふと絶える。遼は「ああ」と頷いて僕の前で身振り手振りをしてくれる。

「まず部長が変だ。こいつは人のことをハリセンでパシパシ叩きやがる。次に、絶対に地球の酸素を浪費している無駄に明るい女がいる。更に最低最悪のキザ野郎だ。気をつける」

「はは……、なんだかとっても楽しそうだね」

僕に笑顔が戻る。この感じ、温かくて……嬉しい。

「楽しくはねえけどよ。……来るか？ 純也」

「うん。行かせて、遼」

やっとわかったんだ。僕の居場所はこの部屋じゃない。ましてや記憶の中でも、雪の下でもないんだ。

「今日は仕事かねえ。早く朝飯作れ」

「わかった、って言いたいんだけど……。身体が動くようになってからでいい？」

「じゃあ俺は寝るぞ。出来たら起こせ」

そう言つて、遼はソファに座るなり寝息を立てる。もう寝た……？

凍えて動かない身体に、感覚がゆっくり戻ってきた。遼が座っていないソファの部分に上半身を預けてみる。ここから見える窓の外は、昨晚降った雪で色を消されたビル街。卓上には、とても大切な青い風車。

「いいよね……ココが僕の居場所で」

大切な人の隣りが。ココが僕の居場所でありたいと願う。『ずっと』は無理だけど、どうか出来るだけ長いあいだ……遼の傍にいらせて。

第四章 『風車』 終演

第五章 『みんなの支部』 (1)

第五章 『みんなの支部』

乱暴に階段を駆け昇ってくる音に、習慣にない、椅子から立ち上がる。その手にはしっかりといつものアイテムを握り締めて。

「来たわね」

「愚かな……」

二人の部下の声も、やっぱりいつもと同じ。右腕は振りかざし、左腕は真っ直ぐ照準を合わせるようにドアへ伸ばす。さア、構えて

……せーのっ！

豪快に開かれるドア、そこへ間髪入れずに右腕を一閃させる！

「遅いんじゃボケエエエ！」

「ぐわああっ!？」

今日も、ある意味では清々しいくらいエエ音が事務所に響く。

部下を張り飛ばしたハリセンを、ポンツと肩に乗せる。流石裏社会仕込みの『強化ハリセン』、長年全力で叩き込んでも全くしならん。

ワイの目の前で階段の壁にまで頭を打って仰向けに倒れてる男が、ゴソゴソと動く。

「遼平！ あんたちとは反省とかできんのか!? だいたい……ん？」

「いてて……」と頭を押さえる紺髪の男の身体が、何やら下からゴソゴソと揺れて……細い色白の腕が出てきた!? 何や!?

「りよ、遼……重い……」

「あ、ああ、悪い。ってというか俺のせいじゃねえよ、真が……」

「と、とにかくどいて……」

遼平が立ち上がると、その下敷きになっていた少年がおった。髪が真っ白やから最初は老人かと思ったが、その白い肌は明らかに若者のものやった。どうやら張り倒された遼平の後ろに立っていたらしく、そのまま潰された……っぽい。え？ ワイのせい？

「……ったく、いい加減その出勤した途端の一撃はやめろよ。俺の脳細胞が確実に毎日死滅していくから……」

「案ずるな、貴様の脳細胞は既に全滅済みだ」

「んだと紫牙あぁー！」

やっぱりいつも通りの朝の戯れ言挨拶。こいつらにとってはケンカが挨拶みたいなモンやから……もう注意する気も起きへん。それより、ワイが気になっとるのは。

いきり立つとる遼平の後ろでおろしとる少年。着ている洋服は大きめでダブダブ状態。歳はいくつぐらいやろ……十二〜三くらいか？ 大きく開かれた青い瞳は、好奇心のままにワイらを観察している。誰や？

「んじゃ何か？ 俺の脳はただの飾りだつてのじゃあつ！」

「案ずるなと言っているだろう、『飾り』ではない、『重荷』だ。しかも俺にとつては手ごろな物的でもあるな」

「誰がてめえの物的だとおおっ！」

「わからんか？ ならば実際撃つて見せるが？」

手元の本を読みながら、器用にも遼平を見ないままリボルバー式マグナムを構える溲斗。いつものようにワイが止めに入る前に、二人の間に割り入った小さな影があった。

「貴様は……？」

初めて少年の存在に気付いた溲斗が、やっと顔を本から上げる。

白髪の少年は、遼平の前に立って必死に首を振っていた。遼平をかばっとる？

「どけ、チビ」

遼平に襟首掴まれて、少年は不安げな顔しよる。なんか、よくはわからんが……。

「心配することないで、こんなケンカはしょっちゅうやから。死なへんって」

「……ほんとう？」

まだ高い、子供らしい声。澄んだ瞳で見上げられて、笑みが零れる。本気で心配したんやなア……ま、最初はそう思うよな。確かに途中で誰かが止めんとその内マジになるが。

「ちよつと遼平、どしたのその子？」

「そつや。いきなり連れてきおつて……誰なんや？」

「貴様、とうとう幼児誘拐か？」

「違えよっ！ 一々気にさわる言い方すんじゃねえ！」

じゃあ何？

ワイら三人の視線は、温度は違えどみんなそう言っておつたと思う。少年が僅かに泣きそうな顔をして、遼平を見上げる。その小さな頭を遼平は上から押しつけた。

「まさか……隠し子？」

「有り得んな」

希紗の突飛な予想に、澪斗と即答。遼平が一言も発する間を与えずに。だって明らかにそれは無いやろ？ 年齢差とかやなくて、まづ遼平が女と上手くいくはずないやん。

「説明しろや遼平、職場に連れてきたからには」

プライベートがどうだろつともちろん自由。せやけど、事務所にまで連れてきたら黙っているのは部長としてちよつと、な。……まあ、好奇心が八割やけど。

「あー……こいつはー……弟、だな」

「「弟おー!?」「」」

ホンマか!?

ワイら三人はそれぞれ動揺。澪斗でさえ目を僅かに見開いておる。全員で背の低い少年に近寄る。

「え、え、ホントに遼平の弟なのっ? かわいいー」

「なんで……あんた弟おるなんて話してたか?」

「……似てないな……」

それぞれ正直な感想を述べる。困まれて、遼平の弟……らしい少年はおどおどする。遼平は鬱陶しそうにワイらを払った。

「見せ物じゃねーんだよ、どけ」

「ね、君、名前は?」

遼平の言葉なんか聞いちやいない希紗が、中腰になって少年に話しかける。希紗の瞳を見つめて、少年は口を開く。

「……純也」

「蒼波純也? この子も蒼波一族なんか?」

「いや、こいつは……腹違いだ、蒼波じゃねえ」

遼平の目が泳ぐ。腹違い? にしても面影全く無いなア……遼平みたいに目つき悪くないし、髪の色だって全然違うやん。珍しい色しとるわア、白髪なんて。

「……で、何故今更弟を連れてきたんだ、貴様は?」

澪斗のもっともな問い。本題はそこや。遼平は少し考えるような

間を置いて。

「あー……、こいつの親が旅行でな、しばらく預かることになった」
「な、おい、預かるってあんた……」

「よろしくね純くん！ 私はねっ、希紗よ」

ワイの言葉を遮って、希紗が嬉しそうに自己紹介しだす。『純くん』？ あア、『純也』やから？ なんて単純な呼び方……。

「きさ、ちゃん？」

「きゃーっ、遼平に似てなくてお利口〜！」

「誰が似てねえだっつ」

「……貴様、もう『ちゃん』付けされる歳ではあるまい」

「何よ、私まだ十七よ！？ あと十年はいけるわ！」

「お、おいあんたら人の話を……」

きちんと聞け！ って言いたかったワイの言葉は、再び遮られる羽目になる。ワイって……。

「……なんだ」

純也に次に見上げられて、澪斗はいつもの視線で見つめ返す。いや、怖いってその眼……エエ加減初対面の人間にその視線はやめろって。ほら、純也も怖がるから……。

「お名前は？」

恐怖心ゼロ！？

っ、強者やわ……やっぱただモンやない……！ 流石は遼平の弟、ってとこか？

純真無垢な好奇の顔で問われて、澪斗は呆気にとられた顔しよる。こんな澪斗の顔って珍しい。「ほらっ」と希紗に腕で小突かれ、我に返った表情で答える。

「……紫牙、澪斗」

「しがれーと……？」

「くくく……」「」と遼平、希紗と笑いを零してしまふ。澪斗が殺気を放って睨んできたので、三人揃って顔を音速で逸らす！純也は姓と名を区切らず、そのまま「しがれーと……しがれーと……シカ冷凍??」と段々妙な方向に一人で向かっていつてる。ついに希紗が嘔き出して笑い始めおつた。

「俺は『澪斗』だ、間違えるな子供！」

「くく、くくく……いいじゃねーか、間違つてねえよ、『鹿冷凍』で」

「貴様あ……！」

「れーと……れい、と……澪斗」

頭上で火花を散らすアホな大人二人には気付かず、純也は噛み砕くように名を繰り返す。なんやろ、この違和感……この子、まるで……。

「覚えたか子供！」

「うん！ わかったよ澪君っ」

『澪君』……!?

ついに希紗が机を叩いて爆笑する。かく言うワイも目の端に涙が……。邪気を微塵も含まない満面の笑顔を前に、澪斗は今まで見たことも無い驚愕の表情。こりゃクリティカルヒット、やな。

「よしっ、よくやった純也！」

「よ、『よし』ではない！ 貴様一体どういう教育をしているんだっ」

澪斗が狼狽えておる。珍しく。遼平はガッツポーズで純也の頭を乱暴に撫でている。純也はきよとんとした顔で二人の大人を見上げておつた。

「俺は教育してねーよ。間違つてねえだろお？ 澪くくん？」

「貴様ああ……っ、今日を命日だと思ええ！」

再び起きあがるマグナムの激鉄。あーあ、また始まりよった。純也は何も間違っておらんのに……漣君ご乱心？

「やんのかコラア！」

「覚悟はいいかあつ！」

「ちょ、待てってあんたら……」

「やめてよっ、『漣君』……！」

……。

一気に温度の下がる事務所。啞然としている大人達の中で一人、必死な瞳で見上げる少年がいた。あア、何ちゅーか……。

使用者の手から落ちる拳銃の金属音。『消去執行人』と二つ名の付いた男が今、敗北した音。

「……なんかやる気しねー……」

「……俺は、俺は……」

「純也……あんさん良いキャラしとるわア……」

「え？ きゃら？」

膝について純也の肩に両手を乗せるワイに、不思議そうに純也は首を捻る。この子エエ性格や……癒し系？ こんな人間初めてやアア……。

「あ、そうだ、お名前は？」

「へ？ ワイ？」

「うん」とにっこり微笑んで純也は問うてくる。ああ、そういやワイだけまだだったな。

「ワイは一応ココの部長、真や」

「『真君』だね！」

うーん、やっぱ『君』には抵抗あるなア。ま、悪くないか。

……その日は、いつもの変わらない非凡な日から、ちょっとだけ特別な日になった。希紗も、澪斗さえも慣れないゲストに興味を持つておったが、ワイは少し違った。

この子供、何か引つかかる……。

第五章 『みんなの支部』(2)

「それで、どーしてこうなるんや？」

腕を組んで、眼前の光景にため息を零す。眉間に寄ったシワは疲労の度合いを表示しとる。まだ今日は浅い方。

「何がだよ？」

「わからんか？ この状況が、やつ」

ライトアップされたショーケースの方をビシッと指す。その輝くガラスの前で、手を張り付けて心奪われたように眺める少年が一人。「ね、ねっ、すごくキレイだね、コレ！ コレ何？」

「緑柱石……ベリリウムなどを主成分とする鉱石で、エメラルドと呼ばれる宝石だ。これは二十五カラットある」

「エメラルド、かあ……」

淡々と答えた澗斗の言葉を全て呑み込み、純也は網膜に焼き付けようとするほどの勢いでショーケースの中を覗いている。こっちの声なんか全く届いていないんやろなあ……。

「なんで仕事にまで純也を連れてきたっ？ 遊びやないんやで！」

「うっせーなー、邪魔はさせねえよ」

「邪魔とかの問題やない！ もし何かあったら……」

保証は無い。事務所だけでなく警備にまで純也を連れてきた遼平に、少なからず非難を覚える。遼平だってこの仕事の危険性は充分わかってるはずや。いくら頭が弱いゆうても。

「何かあっても、あいつは平気なんだよ」

「またそんな根拠も無い事をつ」

「……平気なんだ。……それに、今日は……雪、だからな」

近くの大きい窓ガラスを遠い目で見やる遼平。その声色がいつもより低くて、暗闇の中でワイは不審そうに遼平に振り向いていた。

今日も雪がぎょうさん降る。

そこまでの理由は何や？ 『雪』だから……？ 一体、純也は…

「ねえ遼つ、どうしてこんなキレイなモノをしまっておくの？ 勿体ないよね、どうして？」

「あ？ それはだな……あー……。そうだ、そう、しまっておかねえと逃げるんだよ、ソレ」

「本当！？ 飛んでっちゃうの!？」

「おう」

おいおい。

「遼平、あんた純也にアホな事吹き込むんやないよ……。純也、あのな、アレは悪い人に盗まれんようにしまつてあるんやで」

ワイがわかりやすいように訂正。「そうなんだあ……。」と純也はもう一度その瞳にエメラルドを映す。あかん、このままやとこの世にもう一人『遼平』という名の大馬鹿に酷似した人間が誕生してしまう。それだけは阻止せな！

「どうして盗もうと思うのかなあ……？ こんなにキレイなんだから、みんなで見ればいいのにね」

同意を求めるように見上げてくる少年の笑顔に、ワイは再びあの違和感を覚える。この少年、何かがおかしい。純粹……っっていうのにも限度があるやろ？ 何や？ まるで初めて世界に触れておる赤ん坊のような……透明さと、脆さ。純也に何故か、空虚感を見る。

ふと顔を上げて我に返るように現状確認。あかんあかん、仕事に集中せんと。

シヨーケースをライトアップしている光以外は何の照明も無い。

ここは高層ビルの八階、外のビル街の光を雪が反射し、弱々しいが外の方が明るい。今回の依頼は、単なる守護やない。

「……………来たな」

「純也、下がってるっ」

澁斗の静かな声に、純也を呼び戻す。直後、強化ガラスが外から勢いよく割られる！

雪と冷気が、風と一緒になだれ込んできよる。一瞬視界が封じられたが、すぐ状況が確認できるようになる。窓の外に、上から垂らしたロープのような物に掴まって降りてくる一団が。

「へっ、この寒い中ご苦労なこった」

「希紗、外の様子を報告しろ」

『はい、屋上のカメラに映ってるけど、わざわざ屋上から降りてきてるみたいよ？ 二十人もいないわ』

「飛んで火に入る、なんとかやな。ま、今は真冬やけど。……………全員確保や、わかつとるな？」

ワイの言葉に遼平と澁斗が頷くのが雪の中確認できた。逃がさず、侵入者は全員捕まえる。今回の依頼内容は……………。

「あ……………ああ……………！」

「……………純也。ここにいる」

自分の手に触れる雪を怯えるように見ていた純也の肩に、遼平が何気なく、でもしっかり手を置く。それだけで純也は身体に電気が走ったように遼平を見上げた。その顔は泣きたそうな安堵……………？

「ちっ、警備員か!？」

「ご名答。逃がさへんで、覚悟しい」

腰に差していた阿修羅を構える。もちろん鞘のまま。澁斗と遼平とワイの三人なら、五分とかからんやろな。それよりあの窓の後始末の事が心配やわア。

「俺達をなめるなよ！ たかだか警備員ごときがっ」
「はっ、その『たかだか』にボコられても泣くなよっ？」

先ほど純也にかけた声色とは全く違う、愉快そうな音で遼平は突っ込んでいく。

不安そうな顔で見上げた純也の髪を撫でてからあいつが飛び出していったのを、ワイは見逃さなかった。

第五章 『みんなの支部』 (3)

遼平がいの一番に飛び込んでいき、漣斗も既に照準を合わせてノアの引き金を引いとった。いつもの事やけど、ワイが一番最後や。遠目に全体を見渡して、《穴》になる場所を埋めるのがワイの役目……って、いつの間になつとった。だって漣斗も遼平も全然人の指示聞く気無いんやもん。だから元より指示なんて出さん。あつちが勝手に動くなら、こつちも勝手にまとめるだけや。

出るタイミングを窺っていたワイの目が止まる。左から二番目の男がショーケースに飛び出した！

「近づかせんっ」

漣斗と遼平の《穴》から抜け出た一人を、鞘の一閃で薙ぎ飛ばす！ 横の壁に飛ばされていく身体。一応攻撃の手は考えておる。

「漣斗、遼平！ 絶対に落とすんやないで！」

ここは高層ビルの八階や、落ちたらまず命は無い。勢い余って突き落したりしたら、大変な事になる。……あいつら、ちゃんとその事考えておるやるか……あア、まず無いな。とりあえず、遼平は。

「おらおら手ぬるいんだよーっ！」

一発の強打で昏倒させていく遼平が、その足下に気絶した者達を重ねる。漣斗がカートリッジ切れのノアを再装填させている。あとは……。

「な……っ！？」

ふと横を見て、ワイは一瞬気が抜ける。さっきワイが飛ばした男を、純也が心配そうに介抱してる！？ なっ、何しとんのやあの子

はっ？

「純也！ あんさん何してるっ」

「えっ？ だってこの人痛そうだから……」

「その人はエエのっ！ 悪い人やから！」

なんでワイ説明しとるの？

「でも……」と純也はまだ不安そうに男の腕を優しく握っている。手加減したから、骨の一本や二本ならともかく、絶対に死なへん。……純也も、よく診る内にわかったらしく、恐る恐る離れようとした。が。

「うわっ？」

純也が介抱したせいで男が目を覚ましよった。しかも、純也はその男に捕まる。ああもう！ せやから言ったのにつ！

「よかった、気がついたんだねー」

「おいっ、状況考えんかい！ あんさん捕まっとなの！ 良くないからっ、何一つとして良かったコトないからっ！」

思わずツツこむワイ。いや、なんか血が騒いで……ツツこまずにいられなかった。ハリセンが手元にあつたら使いたい気分やわ……。

「へ、へへ……ガキが……！ おいお前ら！ このガキがどうなっても知らねえぞっ」

うわー、よくある手やわア。しかもタチ悪いし。ったく、だからワイは注意したんに……どないしよ？

「遼平っ、いったん下がれ！ 漣斗も止まれ！」

「ああ！？」

「ちっ……」

思いつきり叫んだので二人にも聞こえたらしく、場はふっと静か

になる。純也を強く身体の前で掴んだまま、男はゆっくり少なくなつた仲間の元へ歩み寄る。顔は興奮に歪んでおつた。

「動くなよお前ら……」

「ふん、俺がそんな脅しに乗ると思つのか」

『俺が』って言い切るあたりが澁斗らしい。遼平だって普段なら動じないはずやけど、今回は違つかも……とちらつと遼平を窺つと、その顔はにやけておつた。……何考えとんのや？

「純也、聞こえるかー」

「え、何、遼？」

「そいつら悪い人間だぞー」

「そうなの??」

自分が捕まつとるってまるでわかつてない。頭抱えたい気分やつた。にしても、遼平は何言つとるんや？

「お前ら、ふざけた事を……！ 一人ぐらい死なねえとわかんねえか！」

銃口がワイに向く。……へ？

「え、何！？ ワイツ？ ちょっと待てっ、ワイ何も言っていないやん！」

焦つて顔の前で手を振る。『脅しに乗らない』ゆうたのは澁斗やし、挑発したんは遼平やん！ ワイ黙つてたのにっ！

「おおすげーな真、ご指名だな？」

「今まで何処にいたんだ？ 影が薄すぎてわからなかったが」

あんたらアアアっ！！

「ずうつとワイはここにおったわ！ 影薄いって言うな！ 最近モ口に気にしとるんやからっ」

あ、なんか胃痛してきた。ワイってつくづく不運……。

「うるさいぞお前ら！ その金髪、死んどけええ！」

ええええええーっ！？

『死んどけ』って、そないに簡単に言わないでええっ！ 人の命って大事なんよー！？ …… あ、ワイが言っても説得力無い？ せやねえ……。

とかなんとか考えとる間に力が込められる引き金。避ければ純也が危ない、か…… 飛び込めば一瞬で片づけられるか？ ここはイチかバチか……！

「ダメエエ っ！！」

「へっ？」

高い叫び声と一緒に強風が吹き込んできて…… 全ての視界が、白に染まった。

第五章 『みんなの支部』 (4)

雪で前が見えへん……強風で立ってることすらやっとや。何かの呻きが、暴風の音の中から微かに聞こえた気がした。

やがて、風が治まっていく。何だったんや？

「ダメだよ……ダメ……」

少年の祈るような声。せや、純也大丈夫か！？

純也は……無事やった。無事じゃなかったのは、純也を掴んでいた男の方。純也に押さえ込まれて床に叩き付けられとる。もう意識は無い。

「純也、やっていいぞ」

遼平の声が澄んで届く。その声に含まれた余裕と……重み……？
「……ダメ、みんなを傷つけないで……！」

一斉に純也に飛びかかる侵入者達。澪斗が銃口を上げ、ワイも踏み込んだが間に合わん！

再び吹き荒れる暴風。タイミングが良すぎる……さっきからどうなつとるんや？ 今度はあつちで何が起こってるのかはつきり見える。プロのこつちが驚くぐらいの体術で、純也はいとも簡単に侵入者達を倒していく。あの力は……。

啞然と事の成り行きを見ていることしか出来ないワイらの前で、侵入者達は全滅しつつかった。

しかし、純也が腕を伸ばした最後の男が、焦って足を踏み外し、窓の外へ落ちる……！

「あつ」

何を思ったのか、純也がそれを追って飛び出して落ちていく！

馬鹿なっ！？

「純也アアアーっ！」

声は吹雪く冷たい強風に掻き消されてしまふ。唇を噛み、右手で鞘を握り締めていた。

しまった……助けられなかった……ワイの責任や……っ！

「……」

スタスタとワイの横を通り過ぎ、遼平が割れた窓へ向かう。ふと見えた横顔の口元は軽く引き上がって……？

窓際にしゃがみ込み、下へ腕を伸ばした遼平は、何かを掴んで軽々と引き上げる。雪のような、白く細い腕を。

「……よくやった、純也」

片腕を引き上げられて、這い上がってくる小さな影。もう片手に失神した最後の侵入者を抱えていた。ワイは澪斗と共に驚愕する。どうやって……！

「純……也？」

「あ、みんな怪我無い？ 大丈夫？」

「それはこっちの台詞やつ。ていうかどうやって……」

「うん？ ちょっと飛んで、そこに掴まってた」

「飛んで……？」

澪斗と顔を見合わせる。わからん事だらけや……何なんやこの子は？

『ちよつとーっ、純くん無事！？ そっちはどうなったのっ？』

監視カメラで一部始終を見ていたのであるう希紗の声が、遅れて

届く。せ、せや、仕事の最中やった。

「こっちは全員捕らえた。そっちのブツは無事なんだろうな？」

『本物のエメラルドは全然無事よ。フェイクの方はなんともない？』

遼平の全く動じていない言葉に、希紗が答える。少し寒そうに震える純也の白い髪を、遼平は軽く撫でながら。仕事は成功……したわけや。

今回の依頼は、『フェイクを使ってそこらの窃盗団を捕まえる』こと。精巧に作られた宝石を匣にして、それを狙ってくる人間を片っ端から逮捕。……というか、実はこれは依頼人が窃盗集団を集めたいらしい。集めたこいつらをどうするのか……色々と想像はつくが、あまり考えないようにしとる。せいぜい手駒にして何かを盗ませる気なんやろな。アホらし。

「まあな。それより寒い……この窓ガラスどうすんだよ」

もう強風は吹かないが、僅かに雪が入ってくる。遼平がわざと話題を純也から逸らそうとしているようで、そんな態度が余計気にさせる。

「……遼平」

ワイが言いたい事を、遼平は察したようやった。横目でちらっとこっちを見て、その瞳は遠くを眺めるようやったが純也に向けられた。

「……だから言っただろ、あいつは平気だつて」

「一体何者や？ 誤魔化しきれるとは思わんやろ？」

「あいつは……人間だ。純也なんだ」

遼平の言葉は支離滅裂。いや、おかしいのはいつもの事なんやけど、今日は拍車をかけて変。

「あんた……何考えとんのや？」

「……これが、俺の《約束》……償いなんだ」

その言葉は、ワイに追及をさせないものやった。『償い』という言葉にワイが弱いのを、遼平は知ってて言っとる。ワイがその単語を出されると詮索が出来ないことを。しかし同時に、遼平が何か大きなモノを背負ってしまったことにも気付く。

視線を遼平から、その瞳の先の少年に移す。足下に気を失った男達を寝かせ、灰色の街ごと白い空を見つめている。その青い澄んだ瞳はつつすらと潤んでいて……何かどうしようもなく悲しくなってくる。この小さな少年に感じる、空っぽな荘厳さ。まるで……そう、まるで《風》のように透明で、強く、儂い。

あの子もまた、ワイらのように影を背負った存在なんやと感じた。そしてそれが悲しい。

この世界は、こんな子供にさえ容赦無くその牙を向けるんか……。

第五章 『みんなの支部』 (5)

遠く小鳥のさえずりが聞こえる……もう朝かア……。

「おはよ！ 真君！」

「あア……おはようさん、純也」

軋む接待用ソファからだるそうに身を起こす。にっこりと微笑んで純也が近くに立つとる。あれ？ まだ九時やのに……。

「どうした？ 今日は馬鹿に早いやんか」

「バカに、は余計だつ。なんで遅刻してねえのにけなされてんだよ」
起きあがってみると、まだ事務所には遼平と純也との三人だけ。

寝起きでぼんやりする視界で流し台まで歩いていき、洗顔を済ませる。タオルが無くて彷徨っていた右手に、ポンツと柔らかいタオルが渡された。

「お、ありがとう」

「うん。あのさ真君、その髪……」
「髪？」

寝癖でもついとるのかな、と鏡を見るが、そういえばワイっていつも髪立ってるし。

「真君、髪が……」

目をおどおどさせながら見上げてくる純也に、腰を曲げて応対する。何をそんなに困惑しているのか、遼平も席に座ったままこつちを見とる。やがて、純也は思いきったように。

「変色してるよっつ」

「……え？」

へ、変色うう???

「ぶわははははっ」と遼平が爆笑する声を横に、ワイは固まる。もう一度鏡に向き直って、ようやくと意味がわかった。……まだ髪を染めてない。

「あ、あのな純也、元々ワイの髪は黒なんやけど……」
「ええっ? そうなの!?! なんで???」

いや、んな事言われても……。

過去の自分を知ってる人間は少ないしここは東京やけど、それでも古馴染みにも会うと色々と厄介やから。昔は黒のまま長髪だったんやけど、会社に入ってバツサリ切った……なんて言えへんし。

「こ、この会社な、黒髪のままやと怒られんのか」

「そっか! だからみんな髪の色が違うんだね!」

我ながらなかなか上手い嘘だったと思う。遼平の事悪く言えへんけど。遼平と希紗は地毛らしいし、澪斗はたぶん染めてるんやろう。「純也はそれ地毛……なんよな?」

「うんっ、そうだよ」

差し込む朝陽に、キラキラと純也の髪は反射する。あれから知ったが、純也の髪は白やない。珍しいなんてものじゃない、銀。いったいどういう風にメラニン色素が分配されたら銀になるんやろ?

「そっか、髪を染めてる人もいるんだね」

今初めて気付いたような仕草。またや……また違和感。一体純也は今までどんな生活を?

「なア、純」

「あ！ 真君朝ご飯まだだよな？ 僕作ってきたんだけどさ、食べ
てくれる？」

「へ？ あ、ありがとう……」

ワイの言葉が聞こえてなかったのか、純也は背負っていたリュックから弁当箱を取り出す。今起きたばかりやから、もちろん朝食はまだ。ここは中野区支部事務所……兼、実はワイの家でもあったりする。

戸籍が存在しないので、家を借りられないのがワイの現状。他のやつらは戸籍とか偽装して部屋を借りてるようやけど。本社におつた頃は本社に住み込んで勤務していたから、今と同じ感じ。

純也の弁当はそこそこ美味しかった。この歳で作ったにしては上手い方やろな。家庭的な少年やわア。

「……真、例の話だけだよ」

「あア、アレか。……本気、なんやな？」

遼平は黙って頷く。ここ数日間純也を事務所に連れてきて、遼平は昨日ふとある事を言い出した。……純也を、入社させたいと。

「ワイは何も言う権利は無いがな、後悔……しないか？」

その言葉は二人に向けたつもりやった。当事者の純也はもちろんだが、遼平にも確認しておかないといけない気がする。

「おっはよー！」

「……なんだ、珍しいな貴様がもういるとは」

事務所に希紗と漣斗が入ってくる。二人はいつも通りの出勤時刻。「あ……のさ、みんなに話しておかなきゃいけない事があるんだけど……」

「何？」

全員が揃ったのを見て、純也が口を開く。神妙な面もちなので何を言い出すのかと思って次の言葉を待っていると。

「僕……僕っ、本当は遼の弟じゃないんだ……!!」

……。

「……………なア純也、なんか悪いけど、それもっ知っとる」
「えっ」

意を決して言ったのである。純也が、驚く。澪斗は黙って無関心そうに腕を組んでるし、希紗だって苦笑しとる。今までの流れで気付かん方がどうかして。

「遼、バレてたよっ」

「なんでだ!？」

…………アホがもう一人。

「あのなア、あんたらのドコをどう見たら兄弟に見えんねん」

「愚かにもほどがある。嘘をつくならもつとマシなものを考えろ」

「遼平と純くんが兄弟だったら、マジで『人類皆兄弟』ってコトになっっちゃうわよっ」

ワイらに散々に言われて、二人は呆気に取られている。こいつら本気だったんやな……こっちはとっくに気付いてんに。

「ちっ、じゃあ何で言わねーんだよ」

「だっていきなりやったし。それに、遼平が赤の他人を連れてくる

なんて……なア？」

「貴様に慈悲があるとは考えられんしな」

「何かワケありなんでしょ？ ちよつと様子見ようかなーって思ったの」

遼平が見ず知らずの他人をいきなり拾ってくるなんて考えられなかった。だから、自分から本当の事を話すのを待っていた。……話したくなければそれでも構わないが。

「こいつは……純也は俺が拾ってきた。どうやら 記憶喪失らしい」

「……記憶喪失!?!?!」

再び重なるワイら三人の声。なんか驚かされてばかりや。……でも、そういう事なら全部納得がいく。純也に感じた違和感も、空虚感も。

「基本的な知識は有るが、思いつきり世間知らずだ。なんとか自分の名前だけは思い出したが、他の自分の事はさっぱり……な」

純也は哀しそくにずっと俯いておった。……色々と辛い想いをしてきたんやろう。きつと、受け入れられた事は少なくて。

「ごめん……僕、みんなの足手まといになると思うんだ。でも、頑張るから……」

必死な顔で全員を見上げて、声を震わせながら純也は続く言葉を探してる。その小さな身体に収めきれない多くのモノを抱えて。それでも、この少年は前へ歩こうとする。

「……だあれがいつ足手まといなんてゆうた？ 気にせんでエエ、

記憶なんてゆっくり思い出せばいい。無理はすな」

しゃがんで、純也をやや見上げる形にする。「な？」と微笑みかけると、少年は泣きたいような笑顔になる。純也の心が嬉の感情に染まるのがなんとなくわかって、こつちが幸せな気持ちになった。何故やろう、この少年の笑顔は、人に安らぎを与える。

「こつという時は……ありがとう、でいいのかな？」

「合格や」

自然と零れる笑み、温かくなる心。難しいとわかっている、この子に幸運が訪れることを願う。

「……話はまとまったな。早く行ってこい」

「純くん入社するんでしょ？ 社長ちよつと変な人だけど、頑張ってねっ」

澪斗と希紗の二人、いつの間にかその話を知っておった。さて、こつなつたらワイの出来る事は。

「社長にはワイが連絡取つとく。……それと、純也がこの支部に配属されるようにな」

純也の若さはロスキーパーの中でも異例やが、あの社長なら九分九厘入社させてくれる。ワイからも頼んでおくつもりや。ワイにそんなに権限は無いが、少しぐらいなら我が儘も聞いてくれるやろ。

「頼んだ覚えはねーけどな」

「はいはい、じゃあこれはワイの勝手な計らいつてことで」

恩に着せられたくないのであろう遠平のにやつきに、苦笑で返す。純也が何か言いたそうに寄ってくる。

「真君、僕の為に色々ありがとう。外人さんなのに親切にしてくれて、僕嬉しかったよ」

「そんな、改まって言わなくてもエエって……」

……ん？

ちよつと待て。今、『外人さん』とか言わなかったか？

「な、なア純也、『外人さん』って誰？」

「ふえ？ もちろん真君のことだよ？」

っ！？

もしかと思って恐る恐る尋ねてみると、衝撃の一言が。ワイが外人！？

「真……貴様外人だったのか？」

「それで皮膚の色がちよつと黒いのね、なるほど」

「なんで今まで黙ってたんだよ。どこの国なんだ？」

純也の言葉を鵜呑みにする三人。おいおいっ！

「冗談やないでっ、ワイは真正銘日本人！ 今時珍しいぐらいの純血なんよっ？」

「え、そうなの？ ごめん、僕てつきり……」

「ワイのドコを見れば外人に見えるん？」

「だつてさ……その

おかしな言葉喋ってるから」

ええええええええ　　っ…………。

噴き出して笑い出す希紗と遼平。漣斗さえも顔を逸らして何かを堪えとるっ。お、お、『おかしな言葉』アア!?　ちよっと待てええっ!

「じゅ、じゅ、純くん…………っ、まさか真の関西弁のこと…………」

「カンサイベン?」

腹を抱えて笑いながら希紗が問う。既に希紗は笑い泣き状態。遼平も同じような状況やった。あんたらなア…………!

「よ、よよ、よし純也、そろそろ本社に行くぞ。ついてこい」

「うん。みんな、行ってきまーす!」

「あっ、待て遼平!　純也っ!」

まだ笑いの治まらない遼平が、純也を引っ張って事務所から出ていってしまう。ワイに弁明の時間を与えずに。

「遼平のやつっっ……………希紗っ、あんたいつまで笑っとするつもりや

!?!　漣斗もエエ加減ワイと目を合わせろ!」

指摘するが、二人はワイの命令なんて聞く耳持たん。ひどい……………
こんなのってないやん。これは関西人に対する侮辱やアア……………。

「…………ワイ、やっぱ標準語に直そうか…………」

「やめておいた方がいいんじゃない?　更に影が薄くなっちゃうわよ?」

「そうだな。貴様の数少ない個性がまた一つ欠けるぞ?」

「希紗…………漣斗…………あんたらアアア…………!」

ハリセンが一瞬にしてワイの手中に現れ、音速で一閃させる!

希紗の身体の柔らかさと漣斗の動体視力で一撃は避けられるが、次は外さんっ!

「きゃーっ、ちよっとタンマ!」

「それはあの愚か者専用だろうがっ」

「問答無用や！ その道徳離れた感性を叩き直したるっ！」

三人だけになった支部で、ワイの、ワイによる、ワイのための第一次ストレス発散会が盛大に開催。上司なめんなアッ！

……この後、新たな社員を加えて中野区支部は一層無駄に賑やかさを増すことになる。また護りたい対象が増えたわけで、それも嬉しかった。

願わくば、中野区支部（特にワイ）に幸あることを！

第五章 『みんなの支部』 終演

NEXT 追記『???』

第五章 『みんなの支部』 (5) (後書き)

これで本編は終了ですが、今回はオマケの「追記」があります。
更新が遅れるかもしれませんが、誰のお話かはお楽しみで！

追記『LOVE COUNTER』(1) (前書き)

大変長らく更新を停滞させ、誠に申し訳御座いませんでした。体調不良等の私情にて、消息を絶っておりました。

この追記では一人称ではなく三人称ですが、過去編です。

『闇守護業 4 《黒刃》』の第三章とリンクしておりますことを、先述しておきます。

追記『LOVE COUNTER』(1)

追記『LOVE COUNTER』

「三倍返しい？」

大真面目な顔つきで頷く部長に、『相談事』と言われて身構えていた部下二人は脱力する。

もう春も近い日光が差し込む、平和な事務所の接待用ソファとテーブル。滅多に客人の座らないソコで、昼食を広げていたそんな時だった。

「せや、この時期ならわかるやろ？」

「何が？ カウンターがか？ 三倍にして返すなんざ、相変わらずお前は執念深えな」

「違うよ遼、別に真君は攻撃されたわけじゃないんだよ。反撃とかじゃないよ？」

部長から相談を受けている部下は、男と少年。遠回しに内容を伝えたがっている上司を前にして、男の方は理解出来ずにボサボサの髪を掻き乱す。一方、少年は大方の意味を察したらしい。

「ああ、すまん、遼平には全く縁のない話やったなあ……」

「ンだよっ、真てめえ、そっちから相談しといてその態度はねーだろがッ」

食べかけていた弁当の割り箸で、男、遼平は部長を指す。この展

開になることはあらかじめ予想していた部長、真は苦笑いで「ホントにすまん」と返した。

「どっちかって言うと、ワイは純也に相談聞いてほしかったんやけど」

「僕？ どうして？」

「んー、なんちゅーか……この支部内で純也が最も『ピュア』やない？ 正直、他のヤツらは著しく人間味に欠け」

「「真が言えるのか？」」「」

眼前の遼平を含め、同じ事務所内のデスクに着いていた他二名からも刺々しい問いが聞こえた。部長は軽い苦笑のまま、小さく「……なんでソコだけ聞こえるん」とぼやくが、その辺は見事に彼らへ届かない。

まだ突き刺さってくる視線は意識しないようにして、無理な咳払いで真は話を戻す努力を試みる。

「と、とにかく。先月にとある婦女子から頂いた……よ、洋菓子？ なんや綺麗に包装された品？ そんですぐに返礼をせなあかんと思ってたんやけど、相手が『一ヶ月後に返事を待ってる。三倍返しでねッ』って言うから……」

「真君はどうすればいいかわからないんだね？」
らしくなく頂垂れて悩みこんでいる真を見て、純也はそれなりの一大事なのだと思う。事務所の片隅に放置されている古い女性雑誌から、そんなイベントを最近知ったから。

裏警備会社支部長、霧辺真。独身、（自称）二十代前半。過去の重い枷を引きずり続ける彼の、最近の悩み事といえば。

「うつそー、『返事』ってことはマジなやつ!? 義理じゃなくてっ? 真にチヨコー!？」

「胡散臭え〜、何かの詐欺じゃねえの? お前って騙されやすそうだし」

「そんな風に言わんでもエエやん、ワイにだって春くらい来るわボケっ」

「いや、希紗達の言い分も一理ある。貴様のような生きた化石に、まさかな……」

「誰がシーラカンスやねん!？」

何だかんだで結局は、全員に首を突っ込まれている部長。事務所といえども一部屋なのだから、他人に聞かれないようにするのがそもそも無理な話だ。

大人達がそんなやり取りをしている内に、女性雑誌を引っ張り出してきた少年が「あつた!」とページを広げながら声をあげる。

「お菓子が貰えるのってこの行事だよな、『バレンタインブーム再来! 本気で彼を落とすなら、オススメの惚れ薬はコレ!』……あれ?」

「チヨコレートは関係ねえのか?」

「純也やめておけ、希紗の購読している雑誌はゲテモノ記事しか載つとらんぞ」

「彼女を希紗と一緒にすんなアア!」

「何よその言い草は!? って、ついに本音が漏れたわね真? ふふふふ、『彼女』ですってえ?」

「あ……」などと気付いた時には既に遅い。「へえ」とか「ほお」なんて好奇の眼差しに耐えられずにやがては赤面の彼。この後イジリ倒されるのが簡単に予測出来て、恥辱を忍ぶための心の準備をし始めた。

そしてその予測を確実に裏切らない方向で、部下にあるまじきニヤケ顔を浮かべる彼らがいる。

「ちょっと奥さんご存じい〜？ 霧辺さんったら仕事中に口説いた例の女性とお付き合いしてるんですって〜」

「部下の模範となるべき上司がそのような不埒なことで良いのか？」

「ちゃ、ちゃうって、誰も口説いてないしっ！ あの場合は仕方なかったやろっ、ちゃんと警察から保護せな！ しかも事情を聞くには不安定な生活しとるっばいし……」

「ふーん、そんな込み入った事情を聞くまでに発展してんのかあ？ で、どこまでいったんだよ？」

「ドコもいかんっ、だからワイと友里依はんはそんな関係じゃな」

「へー、その人、ユリエさんって名前なんだー」

「……っっ！」

悪気なんて全く無かった純也の何気ない一言さえ、真を追いつめるには充分で。ましてや意地の悪い三人の声など、呪言に等しかった。

いつもの『胃に穴が空く』というそれなりに実現しそうな喩え以前に、今日は『顔から火が出る』かのようにうずくまって小刻みに震える部長。そろそろ今日も危ないのではないかと心配して胃薬と水を持ってきた純也の腕は、そんな真にいきなり強く掴まれてしまった。

「純也、何にも言わずに手伝ってくれよなっ？」

「え、うん。僕で力になれることなら、もちろん協力するけど……」
ソファに腰掛けたままなので純也を見上げる姿勢になりながらも、真摯な瞳と物凄い力で握り締めた腕は絶対に外さない。その鬼気迫るオーラはいつになく拒否不可能なモノだったが、別に純也は元から協力する気だったので空回り以外の何物でもなかった。

「何よおー、要はホワイトデーのお返しの相談なんでしょー。普通は私を頼らないっ？」

「どーして人生経験の一番少ない純也なんだよ？」

頬を膨らませて不満を口にする希紗と、真の選択が理解出来ない遼平。澪斗はもう興味が失せたらしく手元の本へ視線を落とそうとしている。

そんな部下達へ振り返って、どこか達観したような無表情、恐怖を覚えるほどに冷め切った眼で、部長は答えた。

「希紗は他人の前に自分の方をどうにかせえ、あんたに頼っても成功率ゼロやがな。遼平は顔の全パーツ整形したって兆に○。一もなく問題外。澪斗に至ってはミトコンドリアから生成し直せや人ではないが」

「真君がストレスの溜めすぎでとうとう（色んな方向に）吹っ切れたー!？」

部長の言葉による鉄拳制裁は部下達を瞬殺し、しかも反論の一声さえ許さないテンションの低すぎる声色。ここで逆ギレでもしようものなら今以上の残虐カウンターが返ってくるだろう、こちらが再

起不能になるまで。

「さて純也、行こか」

「あ、は、はい……………あの……………ストレスは独りで溜め込まないで、僕で宜しければいつでもお話聞きますよっ？　というか、毎日毎日苦しめすぎて本当にすみません……………!!」

心なしに震えているような青白い顔の純也を見下ろして、真は爽やかな笑顔で「なんや、いきなりどしたー？」と何事も無かったかのように少年の白銀の髪へ軽く手を置いた。

（こうやって感情をリセットすることで爆発を回避してるんだろうな……………）と思うと、純也は涙を堪えきれない。部長が哀れすぎて。

そして真に手を引かれ、純也も事務所から出ていく。最後にちらっと室内を窺ってから。

春の足音が感じられる朗らかな日差しの中。暗い、暗い、地獄の深淵かのような空気と沈黙が漂う事務所には。奇襲、崩壊、撃沈によって立ち直れなくなった若者達がいた。

これを俗に、『因果応報』と言う。

追記『LOVE COUNTER』（2）

「んー、そもそも『ホワイトデー』って何なんやろなア？ 何をお返しにするべきなんやろか？」

「僕は人から貰ったことないし……真君はバレンタインにチョコを貰ったの、初めて？」

幼い子供達や営業のサラリーマンが慌ただしく目の前を走っているのを見ながら、公園のベンチに腰掛けた二人は困っていた。憎らしいほどに青い空の下で。

まだ記憶の日が浅い純也はともかく、真はコレが生まれて初めてなのだろうか。

「いや、義理でならいくつかあるけど。その時はあまり深く考えもせずに花とか返しとったからなア」

「今回は深く考えて、悩んでるんだね」

「そ、そんな変な意味やないで！？ ただ単に、『どんなモノで喜んでもらえるか』とか『何色が似合うのか』とか『なんて言えばエエのか』とか……、しょーもないコトまで一緒くたになって、もう自分でワケわからなくて……」

肘を膝に置き、俯いた顔を両手で覆って深呼吸のような大きなため息を落としてしまう真。彼の呻き声とため息が止まないのを見て、どこかが痛むのだろうかと純也はオロオロしてくる。

実際、純也は真の言う『変な意味』がわかっておらず、「真君は丁寧だねー」などとどこかのはずれな言葉と共に頷いていた。

「ねえ真君、お菓子を貰ったわけだし、やっぱりお返しは食べられ

るモノじゃないかな？ それと……ホワイトデーだから、白いモノなんじゃない？」

「ああ、それでホワイト言うんかア。白い食品ねえ………何かエ工物ある？」

「僕なら 『白米』 が嬉しいなっ」

小さな手をぎゅっと握り拳にして、純也は真顔でそう宣言する。それはちよつとどうなのだろう、と思いつり気味の微笑のまま「米、なん？」と尋ねれば「ご飯はともエネルギーになるしね！」と満面の笑みで返され、なんだか却下しにくくなってきた。

「あー、でも聞いたことあるなア。昔の農村では、嫁をもらう百姓が相手の家に米を贈ってたって」

「そっか、この国の伝統なんだね！ じゃあ白米で決まり？」

「う、うーん………今時の若い女性に米俵とか贈ってもエエもんかなア？ くう………社長、なんで女性と付き合う術は教えてくれなかつたんですか……！」

心底悔しそうに真は膝を叩くが、反省が遅すぎたのは自分でもわかってる。今まで特に意識せずに女性と接していた、しっぺい返しなのだろうか。

一ヶ月も費やして考えているのに、ついには他人に相談までしたのに、答えのイメージすら出来ないのは何故なのか。一見すると、こんなにも簡単そうな問いなのに。

「……ワイは彼女に、何を贈りたい……？」
結局は、それだけのことなのに。

「でもさ、どっちかって言うとな真君は【贈りたい】んじゃないか？
【んじゃなくて】伝えたい】んじゃないかなあ？ 『あなたからの贈り物がとても嬉
しかったです』って返事を」

ふと、自然に思いついたような純也の一言。そんな少年の小首を
傾げた不思議そうな顔を向けられて、男は喉に言葉も呼吸さえも詰
まってしまった。どこまでも無垢な青い瞳が、『違うの？』と問い
かけてくる。

「そ、それはあかん！ そんなコトを言えるわけがっ、」
「嬉しくなかったの？」

「うう、嬉しかったけど！ 頭ん中真っ白になるくらい、めっさ嬉
しかったけどっ！」

「ならそう伝えればいいのに」
何の策略も下心の欠片さえも無いのであろう少年の、ピュアすぎ
る平然さは続く。今更ながら真は（もしかしなくても人選ミス？）
とか思い始めるが、大丈夫だ、中野区支部の部下達に【当たり】は
無かったから。

このまま恥ずかしさで黙っているには余計に純也からの無邪気質問
攻めに遭いそうなので、残り僅かな余力で彼は反撃を試みた。

「じゅ、純也は恋したことないから、そんな簡単に言えるんよっ？」

「あ、そうか。ごめん、何もわからないのに勝手なこと言って。…

…真君は今、恋してるんだね」

純也の優しい微笑みと遠慮皆無な一撃に、地球語ではない悲鳴を

あげる真。カウンターを更に数倍にして返され、心だけで満身創痕だ。

「違つ、ちちち違いマスよ!？ 恋と言うより恋慕っ？ やなくて愛情!？ っでどんだんヤバくなつとるがなアア!！」などと昼下がりの公園で勝手に身悶えだす男がここに一人。

墓穴製作エネルギー、只今フルスロットル。

とうとう四苦八苦の末に七転八倒するという、奇跡の苦惱コンボを繰り出し始めた真に手を伸ばした純也は、何故か悲しそうな顔をしていた。

白く小さな指に掴まれた男の手首から、あまりにも呆気なく力が抜けていく。いつの間に身体を強張らせていたのか、自分でわからない。

「気になってたんだけど……手、ずっと震えてるよ？ 何か不安？ ……何が、怖いのか？」

純也が何を言っているのか理解できない、それが本音の半分。【自分が今まで震えていた】という事実にはただただ驚愕しているのが、残りの本音。

見てわかるほどに震えていたのだから、よほど何かの感情が高ぶっているのだろう。それを純也は『不安・恐怖』と捉え、心配してきた。

「それは純也が恋とか言うから恥ずかしくて……ッ」

「『恥ずかしい』？ 違つよ、真君の震えはソレとは違つ。脈が苦

しそつだし、発汗の様子もおかしい。何か、負の感情で苦しんでない……？」

心から真を氣遣ってくる少年は、脈をとった手首の方の指に小さな両手を添える。純也の表情があまりに切なそうなので、そこでようやく、真は自分の乱心ぶりに気付くことが出来た。

しかし『負の感情』とは何だろうか……真自身が自覚していないのに、そこまで動揺するほどの感情は何だ？

「無理矢理に想いを押し込めてるような……なんだかまるで『好きになっちゃいけない』みたいな、変な感じがするよ、真君」

「あ……」

きつと、それこそが真実だ。どこまでも透明な少年の瞳で見えたのだから。

言われてみればすぐに気付くことで、あまりにも当たり前すぎて納得と虚脱感に冷たく満たされ、ベンチに腰掛け直して真は光の無い眼ごと俯く。

過去を忘れて己の望みに走ろうとしている、身勝手すぎる自分が怖かったのだろう。その想いだけは抑えなければいけないという、葛藤に苦しんでいたのだろう。

そこに悩む必要性など、有りはしないのに。

恋だの愛だの、そんなモノ、悩み出した時から根本的に間違っていた。

誰かを好きに？

……よく見ろ、私怨だけで紅を求め続けたその穢らわしい手を。思い出せ、大切な人間を無惨に斬り殺された人々の悲痛と憎悪、その全てを背負う肩を。

それでも口に来るのか、『誰かを愛する』と？

「……その通りやね、純也。有り得へん、それは絶対に有ってはならんこと。答えが見つからんのは当然のことやった、ワイは、人を愛する権利をとつての昔に捨ててたんやから」

寂しい笑顔を浮かべていきなりそう言い出した真に、純也は戸惑う。『有り得ない』とか『当然』とか『愛する権利』とか、何を根拠と理由にして彼がそんな結論を出してしまったのか、今の純也ではわかるはずもない。

それでも唯一わかるのは、目の前の男が酷く辛そうだということ。どうしようもなく、悲しそうだということ。

純也が戸惑いと感じ取ってしまった辛い感情で狼狽えているのを見て、真は上手く誤魔化さねばと咄嗟に思った。純然な善意のみで協力してくれた少年を傷つけるなど、あつてはならない。

「え、つと……あのな純也、悪いのは全部ワイなんよ。ワイは昔、すぐく悪いことをたくさんしてもうた。その時、多くの人達が傷ついて、悲しんで、不幸になった。だからそんな悪い人間が、愛したり、笑ったり、幸せになるなんてことは絶対に許されへんねや」

「簡単なお話や、わかるやる？」と小さく微笑みながらも、少しだけ力をいれて純也の髪を撫でる。無理矢理押し当てているようにするのは、こちらの表情を見られたくないから。

過去の悪行、大罪の詳細はまだ少年に話せない。いつかは明かさねばならないが、純也に酷く嫌われて怖がられると思うと、切り出す勇気など湧くわけがなかった。

つまり、今の結論としては。無責任で失礼だけれど、断りの連絡を入れてもう二度と彼女とは会わない。そう明言しようとした口が半分開いた時。

「幸せに、しよう……？」

「純也？」

強引に髪を撫でられて首を下げたままだった純也の、囁くようなか細い音に気付いた。ベンチに座ったままの真と、立った姿勢で顔を正面に戻した純也の眼が合う。

いつになく毅然とした青い瞳で、少年は独りで何かに頷きながら。

「多くの人を不幸にしちゃったのなら、それよりももっともっと、たくさんの人を幸せにすればいいよ。悲しませてしまった分だけ、誰かを喜ばせればいい」

両拳を握り締めて真剣に訴えかけてくる彼に何と返せば良いのか、どんな顔を向ければ良いのかさえ、真は窮する。

感情は算数ではないのだと、人間は綺麗事だけでは満たされないのだと、まだこんなにもあどけない少年に言い放ちたくない。まだ、人間全てを無条件で好いているこの少年には。

ならば作り笑顔で曖昧に肯定しておいて上手く受け流せば良いのに、何故だろう、無表情のまま引きつった顔が整わない。慣れきってしまっただけの愛想笑いの仮面が、作れない。

純也の言葉が、あまりに心地良すぎた。いつそ無知なフリをして本気で浸ってしまいたい、その優しく甘い温もりに。

「あかんつて、そんなの……。決して許されへんと、そんな妥協でこの罪は許さないと……ッ！」

その誓いが揺らぎそうで、見えない罪の枷が疼く。思考を埋め尽くし始めたのは血生臭い紅一色の世界なのに、時折フラッシュのように一瞬だけ、笑いかけてくる彼女が浮かんでしまう。

冷たい汗の流れ続ける顔を両手で覆っても、余計に心配しだして何度も「真君、真君」と呼びかけてくる純也。少年に悪意など一片も無いことがわかっていいるからこそ、『もう黙ってくれ』なんて口が裂けても言えなかった。

真の知る中で誰よりも優しく、穢れなく、それ故に純也は人間の世界に甘い。人の醜い面をまだあまりよく知らないのだろうし、出来ることならこれからも知ってほしくないと思う。

そんな純也の温かい言葉を【綺麗事】だと感じてしまった、荒んだ自分が嫌だった。真っ白な純也が、羨ましくてしょうがなかった。これ以上甘い言葉をかけられたら、気が狂ってしまいそうだった。

「確かに許されないよ、許しようがないんだ、過ぎた不幸は決して埋め合わせ出来ないもの。だからこそ、未来のことを考えようよ？ 真君の本当の想いを伝えることで、きつとユリエさんは不幸にはならないよね。これから先の不幸は、いくらでも補えるよね？」

予想に反して聞こえたのは、アルトでの重たく悲しそうな声。

ずつと真剣な表情だった純也の最後の問いだけは、答えを真に求めているように感じた。不安そうに眉を寄せて、どこかすがるような響きを込めて。

純也自身も薄々感付いているのだろうか、それが極めて困難だということかを？ 所詮は理想に過ぎないのかもしれないと？

……そうなのだとしたら、こう言うしかないではないか。真が選び取るべき言葉はコレしかない。

「せやな、努力すれば未来の不幸はきつと回避出来るな。誰かを幸せにすることも、きつと可能や。……ワイが愛することで彼女が幸せになれるなら、それが一番エエ」

コレも償いの一種なのかもしれない、と。

「そうだよねっ」と純也が至極嬉しそうな笑顔になったので、やはりコレで正解だったのだと確信した。

追記『LOVE COUNTER』(3)

遠く川の対岸の夜景が望める、全く人気のない静かな公園。頼りないぼんやりとした電灯の下で、川を見下ろせる柵に寄りかかって夕闇を眺め続ける男がいた。

ふと軽い足音が速まってくるのが聞こえ、真はゆっくりと振り向く。

「ご、ごめんなさい、遅れちゃった？ まだ時間……」

「ああ、まだ待ち合わせの時間やないよー、友里依はんは遅れてないって。気にしないで、女性を待たせるんはマナー違反やから」

暦の上では春と言っても、陽が暮れるとまだ肌寒い。そんな中でも肌の露出が多めな服で身体が細い、二十歳に達していなさそうな女性が電灯に照らされる。

明るいブラウンの髪はお下げにしてあり、顔にはまだ幼さが残るのに、彼女のスタイルも雰囲気も大人らしい。

一方で昼間までの動揺ぶりはドコへ行ったのか、真が浮かべる表情は穏やかな微笑だ。

今更ながらはにかんで「こんばんは」などと挨拶し合っている若い男女は、遙か向こうの対岸で光っている複数の点などに気付きはしない。

「真はああいった女を好くのか？ 纏う布地が少ないな……」

「違うわよ、あれはそういうファッションなのっ。……それにしてもちよつとちよつと、かなりカワイイ美人じゃないのよ、真じやあ高嶺の花だつて」

「確かに、あんな今時の若い女とは会話すら噛み合わねーだろうなあ。ただでさえ精神老け気味のくせに」

「……ねえ、やっぱりダメだよこんなの。っていつか、みんなは何がしたいの？」

夜の河原にブルーシートを敷いて座り込み、双眼鏡で対岸の公園を見つめ続けている怪しい若者一団。当然の如くで希紗が暗視双眼鏡と盗聴スピーカーを容易に取り出す辺りは、なるべく触れないように男達は努力している。

一応は双眼鏡を渡されたものの、罪悪感から純也は腕を下ろす。真と別れて事務所に戻った途端、鳩尾を一発殴られて気絶させられ、意識が戻った時にはブルーシートの上だった。いわゆる『道連れ』らしいのだが……正直、気絶させられた意味がわからない。たぶん、そこに深い意味は無いのだろう。中野区支部だから。

「もちろん未来の部長夫人が気になるものね、そりゃ見てみたいわよ。私なんか恋愛成功率ゼロだからお手本にねえっ」

「この俺に『細胞小器官からやり直せ』などとほざいたのだ、軽くこめかみを撃ち抜いてくれるわ」

「真が見事にフラれる場面が見てえじゃねーか、一生モンの笑い種にしてやるぜ。けけけっ、ついでに整形も勧めてやる……！」

カメラを構える希紗と、スナイパーライフルを組み立て終わった澁斗と、美容外科病院のパンフレットを用意済みな遼平を見て、幼い純也でさえ『惨めだなあ』と思う。特に同居人の言動が悲しすぎて。

「もしかして……みんな、ずっとそのコトを気にして今まで立ち直れなかったの？」

少年の率直一直線な問いが襲いかかり、大人達の心から『グサアアアッ!』なる凶星激突音が聞こえた気がした。夕闇以上に暗くなる場、沈黙で一気にながった体感気温に、加害意識の無い純也は「何事!？」と狼狽える。

どんなに幼くても、この場の空気が悪いことは悟れたのだろう。自ら話題を切り替えようと少年は焦った。

「え、えっと、ほらっ、『人を呪わば穴二つ』って言うじゃんっ？悪いことをすると、全ては自分に返ってきちゃうんだよ？だから、こんな盗み見るような真似はやめてさ、」

「大丈夫よ純くん、私はストーキングされたって見られて困ることなんか無いんだから!」

「……それはそれで、女としてどうなのだろうな」

「ンな何の恥じらいもねえ生活してっから、『恋愛成功率ゼロ』とか思われんだよ」

堂々と胸を張って宣言した女に対し、男達はそれぞれの方向に顔を向けて呟く。

当然それを聞き逃さない希紗が「遼平にだけは言われたくないわよっ、この整形ビフォア顔!」と怒鳴れば、「遠回しにブサイク呼ばわりすんじゃないー! てめえら人のこと『整形』がどうとか言うがな、正直そこまで俺は顔悪かねえよっ!」などとブルーシートの

上で取っ組み合いのケンカが始まるわけで。

こうなってしまうてはオロオロとするしかない純也の横で、最後の澀斗だけが至って涼しい表情のまま双眼鏡を覗いていた。

「あ、あの……先日の洋菓子は、美味しく頂きました。ありがとうございます。微妙な敬語に声を引きつらせながらも、特にパニックに陥ってはいなさそうな真。視線を合わせにくそうな友里依が、俯きながらも小さく頷く。

「返事、とか、聞いてもいい……？」

「嬉しかったよ、友里依はん。何て言うか、その……嬉しすぎて、ワイの知ってる言葉じゃ上手く表現出来へんくらいやった」

「ほんとっ？ それって、」

表情を明るくさせて顔を上げた彼女は、自分を見つめる眼が悲愴な色を浮かべていることに気付いた。顔は穏やかな微笑なのに、瞳だけが違う感情を。

結局は自分が嘘をついてしまったカタチになる純也と、持ち上げてから突き落とすような言い回しにしてしまった友里依への、罪悪感は冷たく重い。ひどく渴く喉で、それでも彼は言わねばならなかった。

「……その言葉の前に、たぶん信じてはもらえんと思うけど救いようのない昔話を、少しだけ我慢して聞いてほしい」

「帰るぞ」

「え、いきなりどうして？ 帰るのは賛成だけど……」

低く言い放って立ち上がった澪斗を、ブルーシートに座ったままだった三人が見上げた。どこか暗そうな希紗と遼平とは違い、純也だけは至って不思議そうに首を傾げている。

さっさと盗聴スピーカーのスイッチを切りながら、戸惑っている少年に返した言葉は。

「見え透いた結果など、興醒めだ。これも予想の範囲内だったがな」

「おい紫牙、お前何を怒ってんだよ」

「怒ってなどいない。撤収だ、いい加減にしる希紗」

そわそわしながらまだ対岸が気になっているようだった希紗の双眼鏡も取り上げ、澪斗はらしくなく自ら道具を片付け出す。ブルーシートを引つ張り上げて無理矢理に全員を立たせる彼を見る希紗の表情が、何故か優しい。

「澪斗だって途中までは密かに乗り気だったくせに……。……ま、私も見てられないとは思ってたけどね」

「あの、みんな……？」

「所詮、他人同士は理解し合えない。同じ感性でも持たぬ限り、それは誠に相手を理解したことはない。俺達のように異常な社

会に住まう者なら、尚更だ。裏の人間は理解されない、自分を理解出来ない相手を人間は心から愛せない」

純也に背を向けたまま突然そんなことを言い出した澗斗に、少年の疑問はより深まってしまふ。「似合わねーこと言ってる」などと小さく吐くのは遼平で。澗斗の言葉を苦笑で補うのが、希紗だった。

「真が昔の話をする時って、全てを知った上で自分を理解してほしいのか、相手から嫌って拒絶してほしいのか……どっちが真なりの愛情なのか、判断難しいのよね」

「よく、わからないよ……。遼、アイジヨウって本当は何なの？」

「お、俺に訊くなよ、小難しい理屈なんざわからねえよ。ただ、無性に触れたくなるとか、ソイツの笑顔の為なら何だって出来ちまうとか……そーゆーバカで単純すぎる感情じゃねーの、愛なんて」

いつの間にか吸っていた煙草を口から離して一息ついてから、遼平も河原を後にしていく。焦ってそれを追う純也も駆けていってしまい、最後に一人残った希紗が遙か向こうの対岸へ振り返った。

「それが真の選択なら、私達じゃどうしようもないけど。自分の汚さに対して潔すぎるどころ、嫌いじゃないけど……たまに、張り倒したくなるわよ？」

河原に残されたのは、優しさと切なさの入り交じった声音だけ。

少年期に犯した罪とはいえそれを語るのはどうしようもなく苦しく、今でもその残酷さは生々しかった。己の醜かった部分を強調して語るのが、彼の昔話の癖。

一秒一秒の沈黙が突き刺さるようで、見開かれた彼女の瞳を直視出来なくて。いつそ信じてもらえずに笑い飛ばしてくれた方が、どんなに楽に別れを切り出せただろうか。

けれど、そんな意外と他人を信用しやすくて常識人な彼女に惹かれてしまったのも、また事実だ。

「……ごめん。騙して、すみませんでした。ワイに友里依はんを、人を好きになる権利なんて、有りません」

深々と頭を下げて、『これが返事です』という最後の言葉が喉に詰まっている真の、硬く握り締められた右手に温かいモノが触れる。不意打ちのような温もりは彼をひどく驚かせ、つい上げてしまった眼前には泣き出しそうなのに怒った表情の彼女が居た。

「私、何にも騙されてなんかいないんですけど……。……過去とか権利がどうかじゃなくて、私は今の真くんの気持ちが見たいの。現在の貴方に、惚れたから」

強く握ってくる手を振り解くことが、彼女のためだろう。『嫌いだ』と断言して突き放すことこそが後々、彼女の幸せとなるだろう。それがわかりきっているのに、右手を握り返したい衝動は抑え込めそうにない。

細く滑らかな指先まで全てが、愛おしすぎる。

「……今、あんさんの前に居る男は、友里依はんに心底惚れ込んでるよ。そもそも、気が狂いそうなくらいに」

自分を『霧辺真』と名乗れない弱さを噛み締めながら、それでも右指に力を込めていく。温かさは熱さに変わるが、だからこそ二度と離したくないと思った。

やっと嬉しそうな笑顔になってくれた友里依は、小さく目の端を拭ってから左手も繋いで「ありがとう」を何度も繰り返す。それを聞いて真も感謝の言葉を返しだした為、端から見れば奇妙な男女だったろう。

「その言葉、受け取っていいのよね？ 今から撤回したって、『お返し』として貰っちゃうわ」

そこでようやく、男はホワイトデーの件を思い出した。何を送り返すか、散々悩んだ挙げ句に部下まで巻き込んで、結局は何一つとして用意出来なかったコトを。

「あ……それは 三倍ッ！ あんさんがワイを想ってくれるよりも三倍、友里依はんを愛し返すからっ、それで！！」

両手をぎゅっと握られたまま赤面でそう宣言され、何を言われたのか理解出来ずに一瞬きよんとしてから、友里依も負けじと身を乗り出して。

「なら私はその五倍でっ」

「ええっ？ じゃあ五十倍で更に返すっ」

「百倍いくーっ」

「千でどや!？」

「一兆億〜!」

「そんな数は無いってッ」

終わりそうにない競い合いをしてみても、同時に小さく吹き出して笑う。鬱陶しいモノが晴れたように「天文学的数字やねえ」などと笑いが治まらない真に、「それぐらいの愛がいいものっ」と返す友里依が両腕を伸ばしてきた。

微かな香水の甘い匂いに瞬間だけ惚けてしまった男の首に腕を回して、背伸びをしてまで抱きついてくる彼女に驚いた。伝わる体温や跳ね上がる心拍数で、もう思考回路が正常に機能しないかもしれない。

「私ね、セツナシユギなの。過去とか未来はどうでもよくて、《今》さえ満たされるならそれで充分幸せなの。今の真くんが大好きだから、他は要らないわ」

友里依が苦しくならないように少しだけ腰を曲げて身長差を縮めてから、細い背中を抱き寄せてみる。もう理屈や理由は抜きにして、ただ人間の温度を感じていたかった。

「はは……若い子の悪い癖やね。そないに向こう見ずな生き方はあかんよ?」

全ての事柄に資格や権利を問うことはやめようか、などとらしくなく考え直す。彼女とただ一緒に居たいというこの気持ちを、『言

葉』なんかで理屈詰めにしたくない。

先程の言葉に友里依が少しだけ不満そうだったので、近づいてしまった顔を合わせて素直に微笑むことにした。

「そついつの、嫌い？」

「いや、友里依はんなら大好きや」

彼らがバカップルとまで呼ばれてしまうのは、もうちょっと後の話。

愛に暴走しすぎた二人が中野区支部社員達を失神させるのは、また別の話。

これは単に、若くして歪んでしまった彼らなりの、どうしようもなく純粹な愛の小話。

追記『LOVE COUNTER』終演

依頼5 《過日》完了

追記『LOVE COUNTER』(3) (後書き)

これにて、『闇守護業』第五話は全て終わりになります。

一時は更新をストップさせてしまい、誠に申し訳御座いませんでした。

続編も予定しておりますので、もし宜しければまたお越し下さいませ。

一言でも何か残していただければ、幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7393a/>

闇守護業 5 《灰想》

2009年7月3日19時01分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。